

## メソポタミアの都市と国家

— 「よそ者」の都市化への影響と都市国家の出現 —

小泉 龍人\*

考古学における都市の本格的な議論は G. チャイルドに遡り、時代の推移とともに、都市誕生にいたる過程の議論と国家的な組織の形成についての議論が展開していった。本稿では、まずチャイルド以降の都市化と国家形成をめぐる議論のおもな動向を整理した。

つぎに、メソポタミアの風土を概説し、墓制の変化から「よそ者」を定義し、それが都市化に大きな役割を果たしたという作業仮説を本稿の議論の起点にした。都市化について3指標（都市計画、行政機構、祭祀施設）を設定し、よそ者の影響による平等主義的なウバイド期の社会から格差や階層化を示すウルク期の社会への推移を、街づくり、社会的緊張・交易、政治支配化の面から素描した。都市化の帰結点として3指標を満たす都市を定義し、川の流路方向に沿う軸線がメソポタミアの都市計画の基礎になったことを示した。

また、メソポタミアでは都市誕生後しばらくして都市国家が出現したが、これまで両者があいまいに議論される傾向があった。そこで本稿では、都市国家で顕在化する行政機構（中央集権化）について考古学的な視点で検証し、領域を示す境界石、主神を祀る神殿の輪郭をモチーフにした都市記号、王の住まいとなる本格的な宮殿をもってして都市国家の出現として定義した。

さらに、メソポタミアにおける都市化と都市について階層性と多様性の切り口で論じ、遺跡間と遺跡内の階層性に関して問題点を指摘した。多様性に関して推定人口（密度）からシュメール地方の都市的集落に都市誕生の潜在性を見出した。そして、都市と国家の議論について近年の動向も踏まえながら、都市記号などの都市国家出現で際立つ行政機構や、外部集団の共存するゾーニングの拡充や土器生産体制の分業化などの都市計画を比較検証することにより、都市国家を考古学的に捉える方向性を眺望した。

## キーワード

メソポタミア、ウバイドーウルク期、都市化、都市、国家

## 目次

I はじめに	IV 都市化素描
II 議論の動向	1 快適な街づくり
1 チャイルドの都市の定義	2 緊張関係と交易
2 都市化・国家形成論の推移	3 政治支配化
3 北方の先進性	V 都市化、都市、都市国家
III 議論の起点と定義	1 遺跡間と遺跡内の階層性
1 メソポタミアの風土と「よそ者」	2 推定人口と多様性
2 都市化の指標と都市の軸線	3 都市と国家
3 都市国家の出現	VI おわりに

\* NPO メソポタミア考古学教育研究所

## I はじめに

考古学における都市 (cities) と国家 (states) の議論は、20世紀を代表する研究者の1人であるG. チャイルド (Childe) による提起が一つのきっかけとなった。チャイルドはいくつかの重要な定義や方法論を唱え、農耕牧畜の開始に留まらず、都市の出現も革命的であると主張したことで知られる。チャイルドは「都市革命」(Urban Revolution) 論 (以下、都市論とする) において、最古級の都市が成立する10項目の条件を提唱した (Childe 1950)。そこには、やがて注目される社会の複雑性 (social complexity) や国家形成 (state formation) といった視座の予兆があった。

小稿では、まず、チャイルドの都市論が以降の考古学や関連分野における都市と国家の議論にどのような影響を与えたのか振り返りながら、都市化 (urbanization) と国家形成をめぐる議論の動向を辿ってみる。つぎに、西アジア (West Asia) の中心にあるメソポタミア (Mesopotamia) の風土を概説し、都市的集落 = 都市的な性格をもつ集落 (city-like settlements) において進行した都市化、都市化に大きな影響を与えた「よそ者」(strangers)、都市化の完成形である都市、その先に出現する都市国家 (city-states) についてそれぞれ論じながら定義する。そして、平等主義 (egalitarianism) を基調とする前6千年紀後半～5千年紀のウバイド期 (Ubaid period) から、社会的格差 (social inequality) や階層化 (stratification) の現れる前4千年紀のウルク期 (Uruk period) への推移についてよそ者の影響の目線から描写する。さらに、メソポタミア周辺 (西アジア) における都市化と都市について階層性 (hierarchy) と多様性 (diversity) の切り口で考察し、近年の研究動向を踏まえて都市と国家を論ずる。

## II 議論の動向

### 1 チャイルドの都市の定義

まず、都市と国家の議論の嚆矢となったチャイルドの論考を振り返ってみる<sup>1</sup>。藤本強が指摘したように、都市には「都」を中心とした政治的な「都城」と、「市」を中心とする経済的な「都市」の両義的な意味合いが

含まれる (藤本 2007: 10-11)。チャイルドの都市論は、西アジアなどにおける市／市場<sup>いちば</sup>を中心として発達した都市を念頭においた議論であった。以下、チャイルドの都市の定義についてまとめた拙稿を抄出しておく (小泉 2013: 84-86)。

チャイルドの提唱した都市論は、ゆるやかな累積過程の結果であり、決して劇的な変化を意味していたものではない (西アジア考古学勉強会 1994)。彼は、メソポタミア文明のウルク (Uruk)、インダス文明 (Indus Civilization) のモヘンジョダロ (Mohenjo Daro) やハラッパー (Harappa) などの旧大陸の遺跡を主眼としつつ、新大陸のマヤ文明 (Maya Civilization) にも触れながら、村落 (villages) から区別しうる都市の10項目の条件を抽出した (Childe 1950: 9-16)。

(1)大規模集落と人口集住、(2)第一次産業以外の職能者 (専門の工人・運送人・商人・役人・神官など)、(3)生産余剰の物納、(4)社会余剰の集中する神殿などのモニュメント、(5)知的労働に専従する支配階級、(6)文字記録システム、(7)暦や算術・幾何学・天文学、(8)芸術的表現、(9)奢侈品や原材料の長距離交易への依存、(10)支配階級に扶養された専門工人。

チャイルドの定義した都市は、灌漑農耕による食糧余剰が社会余剰へ昇華し、さまざまな都市的な特徴 (上記10項目) が累積して出現した結果となる。その論旨は、遺構・遺物などの考古資料にもとづいて工芸技術や生業経済の累積的な発展を捉えた帰納的推理による。根幹には経済における諸関係が歴史変化の主要因であるという唯物史観があり、彼はマルクス主義を応用して技術的变化が社会進化を促すと考えていた。ただ、晩年チャイルドは、マルクス主義で軽視されていた社会的価値や宗教的要因も取り込んだため、その論法の読解には注意を要する。

都市論において、チャイルドは権力や支配の存在を大前提とする演繹的論法を避けていたように見受けられる。あえて国家や都市国家を明示せず、都市構造を「国家組織」(state organization) と呼ぶに留めた。おそらく、先史考古学の立ち位置から文字を伴う古代文明の形成を眺望した彼にとって、国家とは複雑化する先史社会の到達点であり、自明の社会形態とすることはなかったようだ。チャイルドの国家に対する距離感、当時の政治状況からうかがえる。

<sup>1</sup> チャイルドの死後しばらくその業績は軽視されていたが、1980年代以降に出版されたチャイルドの理論や方法論を総括する主要著作・伝記が契機となって評価が高まった (Trigger 1980; McNaim 1980; Green 1981; Tringham 1983)。

19世紀後半、新たに台頭した民族主義や国家主義が考古学の動向に色濃く影響し、すでに色あせた単系進化論に代わって、文化の変化を民族の交替・移住などで解釈する伝播論が注目されていた。しかし、チャイルドはドイツの考古学者 G. コッシナ (Kossinna) のゲルマン民族主義がナチス (国家社会主義ドイツ労働者党) に支持されたことに強い嫌悪感をもち、考古学的文化と特定の人種や民族を結びつけるコッシナ流の伝播論を忌避した。

チャイルドは、スウェーデンの考古学者 O. モンテリウス (Montelius) 同様に、過度な伝播論に傾倒することなく、かつ考古学的型式論にもとづいて、一定型式を共有する遺物や遺構のかたまりを一つの考古学的文化と捉えて、文化の変化は型式に反映されると考えた。チャイルドは民族や人種といった偏見を拭うべく、文化の変化を映し出すモノとして考古資料を扱った。その思考法において国家の姿は抑え込まれていた。やがて晩年になると、彼はモノの集積から成る考古学的文化から人の生活の変化パターンを読み取り、社会の組織的体系を洞察し、都市論を提唱することになった。

つまり、チャイルドの考察対象は、国家から切り離れたモノとしての考古学的文化から始まり、モノの担い手である人とその社会へ回帰することになったのである。彼の都市論は、遺構・遺物の時系列における累積的な変化を追いかけてながら、これらが映し出す社会形態の進化の帰結点として都市を見据えつつ10項目で定義したと言い換えることができる。

## 2 都市化・国家形成論の推移

チャイルドの都市論以降、メソポタミア周辺における都市化と国家形成の議論にはいくつかの画期があった。別稿にてまとめた2000年代あたりまでのおおまかな潮流の中から (小泉 2013)、社会の複雑性とウルクワールドシステム (Uruk World System) について抽出してみる。

まず、1960年代、北米の人類学＝考古学界において民族誌資料の集積にもとづいた段階的な社会進化論が流行り、その潮流はプロセス学派としてメソポタミアのフィールドにも普及した。典型が R. アダムズ (Adams) らによるセトルメントパターン (settlement pattern) 研究であり、航空写真や衛星画像も活用されて、南イラク (Southern Iraq) のシュメール (Sumer) 地方における集落規模や分布傾向の変化するプロセス

が分析された。この研究の最大の功績は、広域サーヴェイ (表採調査) により遺跡規模や遺跡間の序列関係 (10ha を超える遺跡を都市、10ha 以下の遺跡を非都市 (村落) に2分) を定量的に分析し、前4千年紀後半 (ウルク後期)、シュメール地方北部 (ニップル・アダブ地域) の村落で人口が減少した代わりに、同南部のウルク遺跡の人口が増加したという人口動態の推移を復元した点にある (Adams 1981: 252)。アダムズは都市化を国家形成の一側面とみなし、彼の研究成果が「都市＝国家」論の先駆けにもなった。ただそこにはサーヴェイによる遺跡規模の解釈において問題点が含まれている (次節参照)。

1970年代になると、60年代の傾向を引継ぎながら、北米の人類学＝考古学界の主導により、民族誌資料にもとづく人類学的な社会進化論から投影された「社会の複雑性(化)」という視座が展開した。その基層にあったのは、M. サーリンズと E. サーヴィスによる段階的な社会進化論 (バンド、部族、首長制社会、未開国家) である (Service 1962)。この人類学的な社会進化論では、考古資料を「単純から複雑へ」という図式で捉える傾向を産み、最終的な帰結点が都市ではなく国家であったので、メソポタミアでは国家形成の議論が主流となった。

メソポタミアにおける国家形成論の展開は、K. フラナリー (Flannery) による複雑社会の生態系 (システム論) に着目した論考が一つの契機となったようだ。彼はメソアメリカのマヤ文明におけるセトルメントパターン研究などの成果をもとに、通文化的なモデル構築を目指した。人間社会の生態系は、階層的に配列された要素あるいはサブシステムにより構成された適応手段であり、社会的あるいは環境的な負荷が高まると、諸要素やサブシステムの関係が変動して、体系内の情報処理や拡散の必要が生じ、行政管理や官僚的な支配体系が展開したという (Flannery 1972: 421-424)。

同時に、社会構造や支配体系に関心が集まり、社会の複雑化や国家形成の主要因として、環境変動、人口圧、技術発展、社会制度やイデオロギーの変化、交易活動などが想定されていた。こうした社会変化の主要因をめぐる議論として、E. ボスラップ (Boserup) の人口圧モデル、R. カーネイロ (Carneiro) の制約説、M. ギブソン (Gibson) の流路変更と人口圧の関係、C. レンフリュー (Renfrew) の交易モデルなどがある (Boserup 1965; Renfrew 1969; Carneiro 1970; Gibson 1973)。

また1970年代には、地理学の中心地理論 (central place theory) により、G. ジョンソン (Johnson) が南メソポタミアに隣接する南西イラン (Southwest Iran) のスシアナ平原 (Susiana Plain) におけるサーヴェイの成果と、上述のアダムズらによるサーヴェイ成果を地理学モデルで解釈した。このあたりから遺跡規模にもとづいた4遺跡階層モデル (大センター、小センター、大村落、小村落) が提示されていった。そして、H. ライト (Wright) とジョンソンは南西イランのフーズスターン (Khuzestan) 地方の調査により、印章やブッラ (紐の結び目に封をした粘土塊) を取り上げて、前4千年紀における初期国家形成を論じた (Wright & Johnson 1975)。

ブッラのような製品の出現は、当該社会において情報処理の必要性が高まったことによると推定された。これは先のフラナリーの論に通ずるものであり、しだいに管理・記録を示す考古資料への関心が高まった。こうした新テーマへの注目には、1970~80年代に盛んになったイラク、シリア (Syria)、トルコ (Turkey) などにおける国家主導のダム建設により水没遺跡の緊急発掘調査が展開して、つぎつぎと国家形成に関する多様な考古資料が累積していったという背景があった。

そして、1979年に起きたイラン革命、翌年から始まったイラン・イラク戦争により、イラクやイランで発掘してきた各国調査団はシリアやトルコへそのフィールドを転向せざるをえなくなった。戦争惨禍を避けるべく南東アナトリア (Anatolia)・北シリア (North Syria) 地方などで代替された調査成果をもとに、シュメール地方においてウバイド期からウルク期にかけて発生した都市化がメソポタミア周辺へ波及していった様子は「ウルクエクспанション (Uruk Expansion) =ウルク文化の拡大」として捉えられることになった。

1990年代になると、人類学の議論において、社会の複雑化の主要因として権力、管理、支配といった側面が注目され、首長制社会や初期国家の考古学的研究に強く影響していった。T. アール (Earle) は、複雑化した社会の権力や支配の出現について、多様な首長制モデルを提唱している。彼によると、協働により「食糧による財政」 (staple finance) を構築していく集団指導体制型の首長制社会と、威信財 (コミュニティにおける社会的地位や職能を示唆する財物) や「富による財政」 (wealth finance) などで社会的地位や経済的特

権を明示する個人エリート支配型の首長制社会に分かれるという (Earle 1991: 2-3; 小泉 2001: 60)。

一方、こうした広範な諸社会の変化を単純化する人類学的な議論とは異なり、メソポタミアの地域性に着目した考古学的な議論も展開した。S. ポロック (Pollock) は、地球規模的な目線や高度な法則化・抽出化により理論体系の構築を迫る姿勢に疑問を呈し、大局的にとらえた社会・文化発展が個々の地域に与える影響にこそ注目するべきであるとした。彼女は、ウルク期~ジェムデット・ナスル期 (Jemdet Nasr period: 前4千年紀末~前3千年紀初頭) の社会をトップ・ダウン式に支配機構の視点から捉えるのではなく、ボトム・アップ式に経済文書、印章・封泥、共同体内の製品の生産・消費などを追及し、社会的・文化的「コンテキスト (context) =脈絡」を背景とした地域的な活動を探るべきであると主張した (Pollock 1992: 328-332)。

同じ頃、G. アルガゼがI. ウォーラーステイン (Wallerstein) の「世界システム (World-systems) 論」に立脚して、北シリアや南東トルコでの調査成果を包括した解釈モデル「ウルクワールドシステム」を提唱し、これがメソポタミア周辺における都市化と国家形成をめぐる議論の画期となった。彼によると、シュメール地方のウルク社会が「中心」となり、南東アナトリア、北シリア、北メソポタミア、南西イランなどの「周辺」社会を支配していき、中心と周辺の関係は本質的に不平等であったという。ウルクワールドシステムは、先のウルクエクспанションで予感されていた中心としてのウルク社会が周辺地域を支配するという構図を浮彫りにした議論であり、社会変化の主要因として交易が重視された (Algaze 1993, 2005; 小泉 2002a)。

1990年代末、ウルクワールドシステムへの反動として、とくに中心が周辺を支配するという構図が批判された。同モデルの再検証を通して中心と周辺は「対等」と「競合」という概念で代替されていった。その発端はレンフリーらの議論があったようだ。レンフリーは、ウォーラーステインの世界システム論で扱われるような広範な枠組みを設定せず、社会変化を交易などの遠方から伝播してくる外的要因に求めなかった。その代わりに、限られた環境で「同列政体」 (peer polities) が乱立し、互いに競合関係を保ちながら社会全体が変化したという見通しを示した。そして、アルガゼはレンフリーらの議論に立脚しながら、前4千年紀中頃から後半のウルク中~後期に南メソポタミア

で複数の政体が近接して共存したために、競合、交換、模倣、技術革新といった社会変化プロセスが進行したと主張している<sup>2</sup> (Renfrew 1986: 6-8; Algaze 2008: 123)。

湾岸戦争後、シュメール地方での発掘調査は停止したままであった一方、南東アナトリアや北シリアではつぎつぎと調査が展開していき、都市化あるいは国家形成期の資料が着実に累積していった。こうした周辺地域での調査件数の増加とともに在地諸文化が注目され、在地文化と外来のウルク文化との対等性や競合関係を比較検討しながら、メソポタミア全体における都市化や国家形成を模索していく視座が主流となった (cf. Stein 1999; Rothman (ed.) 2001)。総じて、中心と周辺の構図はシュメール地方のウルク文化と近隣地域の在地諸文化に置き換えられ、両者間の非対称な経済的關係は多様性の一つとして解釈される傾向にある (小泉 2002b: 68)。

そして、2010年以降の民主化要求運動「アラブの春」により、西アジアにおける社会不安が激化し、とくにシリアでの外国人による調査が著しく制約されることとなった。代わって、北イラクのクルディスタン地域での調査が活発になってきている。同時に、南イラクでの治安が劇的に回復してきたことによりウルク、ウル (Ur)、エリドゥ (Eridu) などの遺跡での調査が再開されている。これまで南東アナトリアや北シリアに偏りがちだったデータが南メソポタミアからも提供されることとなり、今後はこうした新情報の比較検証が都市化と国家形成の議論に影響をもたらすものと予想される (小泉 2017)。

### 3 北方の先進性

上述のウルクワールドシステムを契機として、従来からの南方 (シュメール地方) を都市化の中心地とする議論に対して、「北方の先進性＝北方における都市化の先進性」が話題になってきた (西アジア文明研究センター (編) 2016ほか)。その基層となっているのは、北シリアのテル・ブラク (Tell Brak)、テル・ハモウカル (Tell Hamoukar) などの遺跡の調査成果であ

る。とくに、テル・ブラクで検出された「目の神殿」や公共施設などをもとに、北方でいち早く社会的格差が現れた後、南方へ都市誕生に向けた波が発信されたのではないかという仮説が提示されている<sup>3</sup> (Ur 2010, McMahon 2020b)。

北方の先進性の要点として、J. ウル (Ur) はテル・ブラクの目の神殿が南メソポタミアに影響を与えたとしている。また「目の偶像」と呼ばれる小さい石像がブラクの北方ウルク中期 (LC3: ほぼ南方ウルク中期前半に併行し、以下ウルク中期前半とする) の住居から検出されることなどから、目の神殿自体の帰属時期もウルク期の早い段階に遡るという。しかし、上限年代“*terminus post quem*”の原理に従うと、目の偶像の帰属時期 (ウルク中期前半) は目の神殿の推定時期の上限を示すに過ぎない。さらに、目の偶像は、目の神殿の床面ではなく、床下4mほどの基壇部分 (古い段階の神殿瓦礫層) に集中し、目の神殿に限定される土製コーン (円錐形レンガ) は南方のウルク遺跡で見られるようにウルク後期 (LC5) と推定されている<sup>4</sup>。現状では、テル・ブラクの目の神殿が確実にウルク中期前半に遡ることを示す資料に欠けている。

神殿建築として、メソポタミアで豊富な証拠が残されているのはエリドゥ遺跡である。エリドゥの聖域におけるウバイド～ウルク期 (前6千年紀中頃～4千年紀) の神殿建築は、先行期の神殿建築の瓦礫を整地して基壇とし、そこに上書きするようにして三列構成プラン (中央の広間を中心としてほぼ左右対称に部屋群の配置された建築様式) の神殿が建てられていった (Safar et al. 1981)。同じ聖域につぎつぎと新たな神殿が累積して、遺跡の中にプチ遺跡が形成されたような格好になっている。その基壇部分では、先行期の神殿建築プランが積み重なるようにして明瞭に検出されている。また、ウルク遺跡のアヌの聖域ではウルク後期以降の「白色神殿」が建立され、その基壇部分からはウバイド期に建てられた神殿のプランが明確に検出されている (UVB XXI 1965)。これらの南方の神殿遺構の累積状況と比較して、なぜ北方のテル・ブラクでは目の神殿の基壇部分に先行期の神殿建築プランが認

2 別稿にてあたかもレンフリーユがメソポタミアの社会変化を主張したかのような表現となっていたので (小泉 2014: 60, 2016: 176)、本稿にて修正した。

3 2014年6月、東京で開催されたシンポジウム「西アジア文明学の創出1」でJ. ウル氏の発表内容は刺激的だった。

4 テル・ブラク遺跡の発掘調査責任者であった A. マクマホン (McMahon) 氏からのご教示による (2017年6月)。

められなかったのか、納得のいく見解が示されていない<sup>5</sup>。

同時に、北方の先進性における論拠の一つとして、後期銅石器時代前半の北方ウルク前期 (LC2: ほぼ南方ウルク前期併行、以降ウルク前期とする) から中期以降 (LC3-LC4) にかけて、遺跡規模が50-55ha から130ha に急増するとされる (Ur et al. 2007: 1188; Ur 2014: 52; McMahon 2020b: 299)。しかし、後者の面積を推定する根拠となる土器は複数の時期 (LC3-LC4) にまたがり、前者の単一時期 (約300年間) の2倍近く (約500年間) の幅で捉えられている。層位ごとの詳細な土器編年の設定が不十分な状況では、時期ごとの居住面積の推移を分析するにあたり各時期幅をある程度そろえた方が良好だろう。そもそも複数時期の混在した土器群と単一時期の土器群を比較して大丈夫なのか調査者に質問したが、明解な回答を得ていない<sup>6</sup>。

さらに、北方の先進性に限らず、サーヴェイ全般における問題点として、遺跡で表採した遺物 (おもに土器) の分布範囲が当該時期の居住範囲をそのまま反映しているかどうかは慎重を要する。また、前述のアダムズのサーヴェイにいくつかの問題点が含まれていることを別稿にて論じた (小泉 2013: 95-97)。アダムズのセトルメントパターン研究において、異なる時期の土器が混在したままで居住利用の時期変遷の根拠とされている点は再検証するべきであろう (Adams 1981: 116-126, Table 10)。

テル・ブラクの調査者は、遺丘周辺は現代の耕作によってかく乱されているものの、耕作により地表の遺物がどれだけ動くかという実験研究結果を踏まえて、現代の表採遺物の分布範囲は当該期の居住域を示す指標として信頼に足ると主張している (Ur et al. 2007: S1)。調査者の主張の根拠となっている研究は、一定期間後の耕作等のかく乱による表採遺物の移動についての検証実験 (イタリア、メキシコ)、墓に副葬された石器の碎片の分布調査 (アメリカ) となる。イタリアでの検証実験においては、4年間で傾斜地では約1/3の資料が15m以上、約半数が5-15m移動し、アメリカでの調査では20-30年の耕作により同一個体から割れた石器片が約10m移動することも報告されている (Ammerman 1985: 40; Roper 1976: 372-373)。テル・ブラクの調査者はこれらの成果を踏まえて、現

代の耕作が認められない区域では50m間隔、耕作によるかく乱が認められる区域では100m間隔で10×10mグリッドを設定して、大規模なサーヴェイを実施した (Ur et al. 2007: S1)。

しかし、テル・ブラクにおけるサーヴェイにおいては、いくつかの問題点が未解決のままである。まず、現代のメソポタミア周辺において、耕作地と休耕地は年によって入れ替わり、調査時に未耕地であっても、それまでには断続的に耕作されてきた可能性が十分にあるため、遺跡全体が耕作によるかく乱を受けたという前提で調査するのが無難である。また、メキシコでの検証実験では、季節的な降雨や耕作によるかく乱により、土器片がかなり移動することも確かめられている (Hirth 1978: 130)。たしかにメソポタミアでは雨量こそ少ないものの、季節的な洪水によりつねに侵食を受けてきたため、遺跡規模の推定において本来の居住範囲と地表に露出した土器分布のずれを考慮しなければならない。

さらに、先のイタリアでの実験に取り組んだ研究者らが30年近くにおよぶ検証実験を実施して、各時期のセトルメントパターンは多様であるため、景観利用は時期によって異なるという見解を示している。彼らは、1970-80年代に全盛したサーヴェイは多くの遺跡を探し出すことにあまりにも執心していたために、方法論自体が十分に顧みられなかったと指摘している (Ammerman et al. 2013: 305)。

これは重要な知見であり、遺跡規模を推定する際、特定時期の遺物の分布している範囲をそのまま同時期の居住域とする従来の楽観的な見方に警鐘を鳴らしている (cf. Murakami et al. 2018)。たしかにテル・ブラクは大丘 (長軸約1km) であるが、もともと複数の小丘が近接して展開していたと推測される。メソポタミア周辺の遺跡形成では近接して併存していた小丘群が拡大して大丘へ融合していった可能性が高い。つまり、都市化が進行して巨大な都市的集落や都市 (次章参照) に成長した遺跡において、過去に遡った特定時期の居住域が当該期の表採土器に素直に反映されているかはきわめて不確かである。サーヴェイによる遺跡規模の推定において、遺跡形成と各期のセトルメントパターンの多様性を十分に留意する必要がある。

<sup>5</sup> この点をウル氏に直接尋ねたところ、「最終的には (テル・ブラク) 遺跡を掘らないとわからない」という回答しか返ってこなかった (2014年6月)。

<sup>6</sup> ウル氏からの私信 (2017年6月)。

総じて、南方に先んじたとする北方の先進性はキャッチーな説として独り歩きしている印象がある。遺構面では、テル・ブラクの目の神殿の推定時期に幅があるだけでなく、同神殿プランはエリドゥに見られるメソポタミアに伝統的な三列構成プランと異なり、目の神殿に先行する神殿建築プランも不明瞭である。遺物面では、同遺跡のウルク中期前半（LC3）と後半（LC4）の土器を混在させた状態で集落規模を復元している。ウルク中期前半から後半にかけては、メソポタミア周辺で土器づくりにおける高速回転ロクロの導入や交易ネットワークの活性化など、都市誕生に向けて都市化がいつそう本格化する頃となる。いくつかの遺跡ではウルク中期前半の直後に文化層が断絶していることから、両時期の推移を慎重に検証することがより説得力のある都市化の再構築につながると考えられる。現状において前4千年紀後半のテル・ブラクは都市的集落として位置づけるのが無難であり、上述したように南イラクで再開されている調査の新情報も比較検証した上で多様な可能性を探る姿勢が求められる。

### III 議論の起点と定義

#### 1 メソポタミアの風土と「よそ者」

本稿で議論する都市と国家は、メソポタミアを舞台としている（図1）。メソポタミアは地理的に現在のイラクにほぼ相当し、北シリア、南東トルコ、南西イランの一部を含む。メソポタミアの景色は、国や地域により多様であるものの、基本的に乾燥した気候のもとで平原が広がり、沙漠や山麓に囲まれ、湿地も点在する。伝統的にメソポタミアの北部はアッシリア（Assyria）、南部はバビロニア（Babylonia）と呼ばれ、後者はさらに北半分のアッカド（Akkad）、南半分のシュメールに細分される。バビロニアでは傾斜勾配の緩やかな地をティグリス川（Tigris）とユーフラテス川（Euphrates）が流れる。

メソポタミアの河川は、恵みだけでなく災いをもたらしてきた。両大河の水源にそびえるタウルス山地の雪解け水や上流域の季節的な降水により洪水が引き起こされる。毎春の雪解けにより川が増水し、春季の降雨が重なると、下流域はまたたく間に洪水に晒される。両大河流域でダムが建設される前、1954年には直前の豪雨と重なったティグリス川の氾濫により、南イラク（バビロニア地方）一帯が大洪水の被害を受けた。『旧

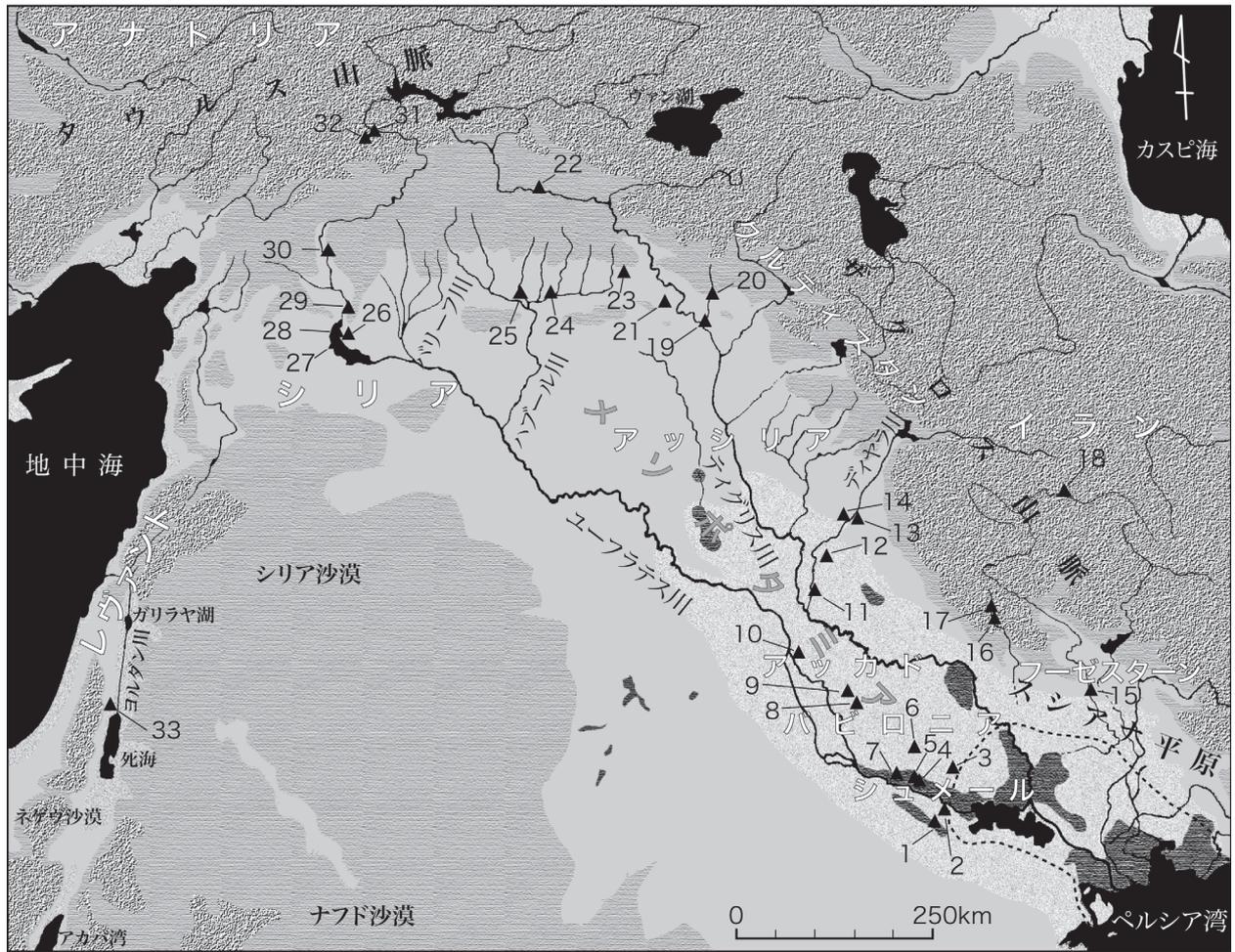
約聖書』の「ノアの箱船」の祖型となる『ギルガメシュ叙事詩』の「洪水伝説」はこうした風土で生まれた。

ティグリス・ユーフラテス川の水源や上流域は、下流域のバビロニア地方からは遠過ぎて見えず、当時、山に積もった雪が溶けて洪水を起こす仕組みや、下流域とは異なる上流域の気象状況は認識されていなかったと見られる。とくに南メソポタミアには起伏の緩やかな平原が広がっているため、滝のような濁流に街が襲われるというよりも、気がついたら街が飲み込まれていたと想像される。毎年、ほぼ同じ季節に、はるか彼方から押し寄せてくる洪水に晒されるたびに、神的な業や意思を感じたのだろうと多くの研究者は捉えている。

同時に、メソポタミアでは、運河を掘削して流路を変えたり、防壁を築いて水害を軽減したり（箱船をつくったり）、予め手を打つこともできた。メソポタミアでは、人知を結集して、ある程度は何とかなることがあったと推定される。こうした水害に対する予見的な対処は、社会発展の道筋における方向性に大いに影響した可能性がある。つまり、メソポタミアの風土の特性ゆえに、そこには都市誕生に向けた積極的な動き、「工夫すれば何とか現状を打開できる」という変化指向が根底にあり、その前向きな姿勢こそがメソポタミア周辺における都市化を促すことになったと考えられる（小泉 2021）。

こうした風土のもとで、メソポタミア周辺ではウバイド期からウルク期にかけて都市化が進行した。両時期はほぼ気候最適期（Climatic optimum/ Hypsithermal）という最も温暖な時期に相当し、その間に社会構造が大きく変化したことが分かっている。

ウバイド期（前6千年紀後半～5千年紀末）では、一般集落（settlements）において住居形態や墓制において何らかの格差を見出すことは難しく、特定の個人あるいは集団が財を独占する積極的な証拠に欠ける。ウバイド期の住居は、上述の三列構成プランを主体とする画一的な建築様式を特徴とし、墓でも広域に共通点が観察される。墓制はメソポタミアの南北で地域差を示しながらも、居住域からみておもに南西～西側に共同墓地がつけられ、個々の墓は地下に掘られた土壇墓を主体とし、日干しレンガあるいは切石の構造を有し、日常生活用の鉢・壺などの土器セットが副葬されたという点で広く共通する。ウバイド期の墓制は水系を単位として、住居プランと同様に均質な文化の一側面を表している（小泉 2001）。



- |              |                 |                   |
|--------------|-----------------|-------------------|
| 1 エリドゥ       | 18 ゴディン・テペ      | 1000m～            |
| 2 ウル         | 19 ニネヴェ         | 500～1000m         |
| 3 ラガシュ       | 20 テベ・ガウラ       | 200～500m          |
| 4 テル・エル=ウエイリ | 21 テル・サラサート     | ～200m             |
| 5 ラルサ        | 22 サラット・テペ      | 海・川・湖             |
| 6 ウンマ        | 23 テル・ハモウカル     | ..... 前4千年紀の推定海岸線 |
| 7 ウルク        | 24 テル・ブラク       | ▲ おもな対象遺跡         |
| 8 ニップル       | 25 テル・カシュカシヨク   |                   |
| 9 アブ・サラビーフ   | 26 テル・エツ=スウエイハト |                   |
| 10 バビロン      | 27 ハブーバ・カビーラ南   |                   |
| 11 ハファージェ    | 28 テル・シェイフ・ハッサン |                   |
| 12 テル・アスマル   | 29 テル・コサック・シヤマリ |                   |
| 13 テル・アバダ    | 30 ハジュネビ        |                   |
| 14 テル・ソングル   | 31 デイルメンテペ      |                   |
| 15 スーサ       | 32 アルスランテペ      |                   |
| 16 パルチネ      | 33 エリコ          |                   |
| 17 ハカラン      |                 |                   |

図1 メソポタミア周辺のおもな遺跡  
 (筆者作成)

墓制の画一性は、祭祀儀礼の在り方も示唆している。前述した都市的集落のエリドゥ遺跡では、メソポタミア最古級の神殿が1号丘の最も高い場所に建立され、同丘の南西斜面で検出された共同墓地には均質な墓制が展開している。被葬者間に際立った格差は認められず、神職に携わる人物の特別な住居や厚葬墓なども未

確認である (Safar et al. 1981)。墓制の観察によると、ウバイド期の社会では祭祀儀礼を執り行う役割が祭司に与えられていたものの、その社会的な地位は一般庶民とほとんど差がつけられていなかったと見られる。祭司たちはフルタイムの神官としてというよりも、ふだんは庶民とともに農耕作業等に従事しながら、需要

に依じてパートタイム的に神職を担っていたと推定される。

ウバイド期では、このように建築様式や墓制が画一的であり、その社会構造は平等主義的な印象がある。都市的集落に建てられた神殿は、共同体全体で執り行われた祭祀儀礼の場としてだけでなく、余剰食糧の保管庫としての機能も持ち合わせていた。構成員が協働して栽培・収穫した穀類などの余剰食糧を鍵のかからない倉庫に供託した。そこでの意志決定は祭祀を取り仕切る祭司集団に任せられ、ウバイド期を通して神殿を中心とした祭祀儀礼により緩く結びついた祭祀統合社会が形成されていたと推察される（小泉 2001: 43-45, 2016: 63-67）。

そして、ウルク期（前4千年紀初頭～後半）になると、メソポタミアの社会構造はそれまでとは異なる様相を示す。その変化のきっかけとなったのが、約6千年前に起きた海水面の上昇である<sup>7</sup>。この気候変動によりシュメール地方では深刻な状況が招来された。ペルシア湾の河口付近の水位上昇により限られた可耕地の水没や、南メソポタミア特有の傾斜勾配の緩やかさに起因した灌漑施設の機能不全（耕地中の塩基物の滞留）などが起きて、海岸近くの定住農耕民は移住せざるを得なくなったと推考される。「よそ者」の発生である（小泉 2016）。よそ者の影響は墓制の変化から捉えることができる。

ウバイド終末期以降、メソポタミア周辺のテル・カシュカシヨク (Tell Kashkashok) II、テベ・ガウラ (Tepe Gawra)、ウル、スーサ (Susa)、ハカラン (Hakalan)、パルチネ (Parchinah) などの遺跡で墓制の多様化が認められ、従来の在地系の伝統とは異なる墓の構造・被葬者数・埋葬姿勢が目立ってくる (Tobler 1950; Woolley 1955; Hole 1983; Haerincx & Overlaet 1996; Koizumi 1991; 小泉 2001)。北シリアのテル・カシュカシヨクでは、北メソポタミアから北シリアにかけて典型であった墓室入口にレンガ列をもつ墓にくわえて、レンガ列に袖レンガを伴う墓などが現れ、南方メソポタミアから南西イランに普及していた伸展葬が初現する。北メソポタミアのテベ・ガウラでは、南方で普及していたレンガ囲いの箱形堅穴墓に類似した練土

囲いの墓が登場する。

同時に、南メソポタミアのウルでは、北方に普及していたレンガ列をもつ構造の墓が現れ、南方で主流であった伸展葬が北方に特有の屈葬に変化している。さらに、ウルや南西イランのハカラン、パルチネなどで、3体以上の成人が同一の墓に多葬され、南方のウバイド期に普及していた家族墓（形質人類学的な所見から男女と見られる2体の成人（おそらく夫婦関係）と子供の多葬）とは異なる被葬者数が観察されている（小泉 2001: 55-58）。

こうした墓制の変化をもとに、筆者はウバイド終末期からウルク前期初頭（前5千年紀末～前4千年紀初頭）にかけてのメソポタミア周辺では、海水面の上昇に後押しされた人の動きが都市化に大きく影響したという作業仮説を立てている。つまり、出自の異なる集団すなわち外部から移住してきたよそ者が比較的安定した暮らしの展開していた都市的集落などに共存することにより、その出身の差異が墓制上の多様性として現れたと考えている<sup>8</sup>。よそ者の発生を境にして、それ以前のウバイド期を都市化前半、以降のウルク期を都市化後半としている。

## 2 都市化の指標と都市の軸線

本稿では、メソポタミア周辺（西アジア）において、ウバイド期終末からウルク期初頭にかけて発生したよそ者が社会変化すなわち都市化に大きな役割を果たしたという想定に立ち議論を進めていく。都市化を論ずるにあたり、先述したチャイルドによる都市の定義を起点としている。たしかに、都市化をめぐる議論ですべての指標を考古学的に検証することは難しく、指標の羅列そのものを疑問視する向きもある。しかし、軸を定めた方が議論の方向が明瞭になるため、都市誕生に向かう変遷過程を解明する切り口として指標の設定は有効であると考えられる。そこで、チャイルドが都市論において最古級の都市を定義した先の10項目を自分なりに捉え直して、都市計画 (city planning)、行政機構 (administrative structure)、祭祀施設 (ritual facilities) の3指標に絞り込んでいる。

まず筆者は、都市化の指標となる都市計画の要素と

<sup>7</sup> 近年の研究では、約6500年前までの海水面の平均気温上昇は氷床が融けたことによるのに対して、それ以降の気温上昇は地球上の二酸化炭素などの温室効果ガス (greenhouse gas) によるものであった可能性が指摘されている (Bova et al. 2021)。その変換期はよそ者の発生直前にほぼ相当しており、こうした古環境の研究成果が考古資料の解釈に大きなヒントをもたらす可能性がある。

<sup>8</sup> 関連する人骨の同位体分析などを実施して、同仮説の有効性を高めていく必要がある。

して、城壁、目抜き通り、街路による区画化、水利施設など考古学的調査で遺構として可視化しやすい側面に焦点を当てている。都市化とは、一定程度以上の集住における快適な暮らしへの追求であり、各種遺構の検討から水まわりの工夫や安全・安心へのこだわりについてある程度探ることができる。つぎに、軍事的な側面も含めた行政機構の要素として、指導者の館、軍事施設・武器、ドア封泥(部屋の扉を封印する粘土塊)、市/市場、絵文字的な記号などの遺構と遺物に注目している。遺構面からよそ者の影響によりもたらされた集落内の緊張関係について、遺物面からは対外的な交易の活性化をそれぞれ描写できると見込んでいる。さらに、祭祀施設の要素として街の主神を祀る神殿を取り上げる。神殿における祭祀儀礼の実践はコミュニティの構成員をつなぐ効果をもたらし、儀礼を執り行う祭司の役割の変遷を辿ることにより、やがて発現する政治的支配を予察できると考えている。

そして、チャイルドの議論に沿って、筆者は都市化の帰結点を都市誕生として位置づけ、これら都市計画、行政機構、祭祀施設の各要素の備わった集落を都市として定義している。メソポタミア周辺に限定したものとなるが、3つの指標をすべて満たせば都市、一部が欠ければ都市的集落、ほとんどなければ一般集落となる。前4千年紀後半のメソポタミア周辺で、これらの条件をほぼすべて満たす最古級の都市はウルク遺跡、その都市計画を模倣して設計されたと推定されるハブバ・カビーラ南 (Habuba Kabira South) 遺跡が該当し(後述)、都市に成り切れていないエリドゥ、テベ・ガウラ、テル・ブラクなどの拠点遺跡 (hub settlements) は都市的集落、大部分の村落遺跡は一般集落として位置づけられる。

メソポタミアの都市には、楔形文字へ発展する絵文字的な記号、街のランドマークとなる神殿、王の住む宮殿につながる支配者(都市段階の指導者)の居所など、まもなく発芽する国家的な要素が備わっていた。かつて、新石器時代のエリコ (Jericho) 遺跡が城壁をもつ最古級の都市と呼ばれることがあったが、城壁とされていた石積みの壁は地盤の低い窪地などに限定され、鉄砲水などの自然災害対策用の施設として再解釈されている (Bar-Yosef 1986; 藤井 2000)。エリコにはメソポタミアの都市に内包されているような諸要素は見出しがたく、銅石器時代(ウバイド～ウルク期)の都市的集落や青銅器時代(初期王朝時代: Early Dynasty period)の都市と同列に扱うには無理がある。

新石器時代のエリコは地域的な大型集落 (larger settlements) として解釈できる (小泉 2016: 18-20)。

メソポタミアの都市の出現は前4千年紀後半となる。都市の主は神であり、最も重要な施設は神の住まいとしての神殿であった。たいていメソポタミアの都市では最も高い所に主神を祀る神殿が建立され、低い所に一般市民の生活する市街地が設定されている。メソポタミアでは神々は天界(星座)に宿るという思想が伝統的にあり、神々のいる天界に少しでも近い(もっとも高い)場所に神殿が建てられた。また、市民の生活排水を垂れ流す下手に主神の住いとなる神殿を置くわけにはいかないため、主神は少しでも高い所に祀られた。当初、メソポタミアの都市は「神の街」としてつくられ、世俗的な支配者の宮殿は不明瞭であった。

最古級の都市として、南メソポタミアのシュメール地方に位置するウルク遺跡が注目されている(図2)。前3300年頃(ウルク後期)の都市誕生段階の面積は約250haと想像されている。ウルクでは文字記録システムの証拠として絵文字的な記号の記された粘土板が5,000点以上も出土し、その量は他の多くの遺跡と比べて桁が2つ異なる。また、ウルクの中心には天空神アン(シュメール語: An; アッカド語: アヌ Anu)を祀るクッラバ地区(Kullaba/ Anu distinct)と性愛と戦いの女神イナンナ(シュメール語: Inanna; アッカド語: イシュタル Ishtar)を祀るエアンナ地区(Eanna distinct)という2つの聖域が配置された。当初、メソ

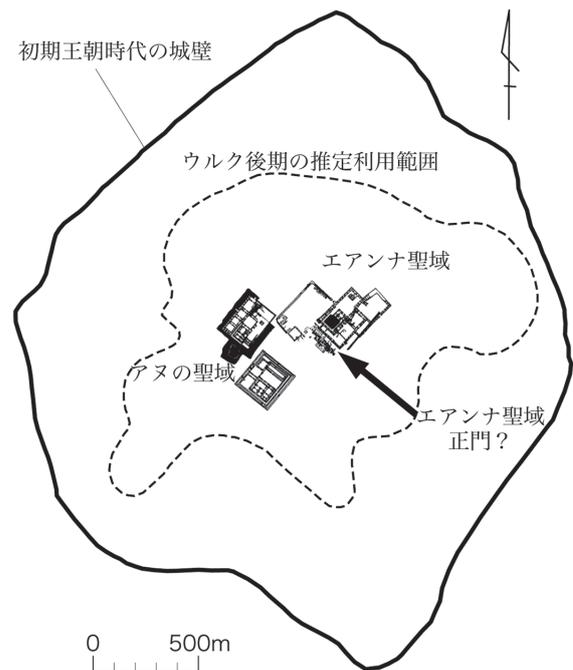


図2 ウルク遺跡

(UVB XXI 1965; Nissen 1993より作成)

ポタミア神話において最高位に就いていたアンがウルクの主神として祀られ、まもなくイナンナに主神の座が受け継がれる。これらの点からウルクは前4千年紀後半の他の遺跡と比べて明らかに際立ち、都市の起源地として最有力候補といえる。

ウルクにおいて、エアンナ地区の南東端に階段と門が確認されている。そこが聖域の正面となり、門前から目抜き通りが延びていたと推定される。その方角で示される街の軸線は、当時のユーフラテス川の流路にほぼ沿って北西から南東方向となる。都市の支配権を授かる儀礼（都市国家において顕在化する王権神授の前身形態）を演じる空間として、神殿と目抜き通りは一体化していたようだ。都市において主神の代理として支配者（後の王）が儀礼によって支配権を授かり、都市を統治する形になっていた。メソポタミアの都市支配者は、いかに主神から認められたのかという点を儀礼の演出で強調する必要があったため、神殿とそれに直結する目抜き通りは都市の存続において不可欠の施設であったと考えられる。

ウルクではおもに聖域が発掘され、まだ市街地についての詳細は明らかにされていない（UVB XXI 1965; Curt-Engelhorn-Stiftung et al. (eds.) 2013）。その街並みを復元する上で参考となり得るのが、ハブーバ・カビーラ南遺跡である（図3）。

ハブーバ・カビーラ南は、ウルクと同じユーフラテス川流域に立地する北シリアの都市遺跡であり、川の流路方向に沿って軸線（目抜き通り）が設定され、ウルクと同様の建築様式の神殿が建立されていた。ユーフラテス川側をのぞく三方は日干しレンガ製の幅3mを越える堅牢な城壁によって護られ、街全体は南北方向を長軸にすえた平行四辺形プラン、面積は約18haとなる。ハブーバ・カビーラ南の市街地はかなりの部分が発掘されて、目抜き通りや細かい街路により計画的に配置された街並みが確認されている。ハブーバ・カビーラ南は植民都市（colonial city）と呼ばれがちだが、発掘したドイツ隊は交易路（Handelswege）上の都市（Stadt）、

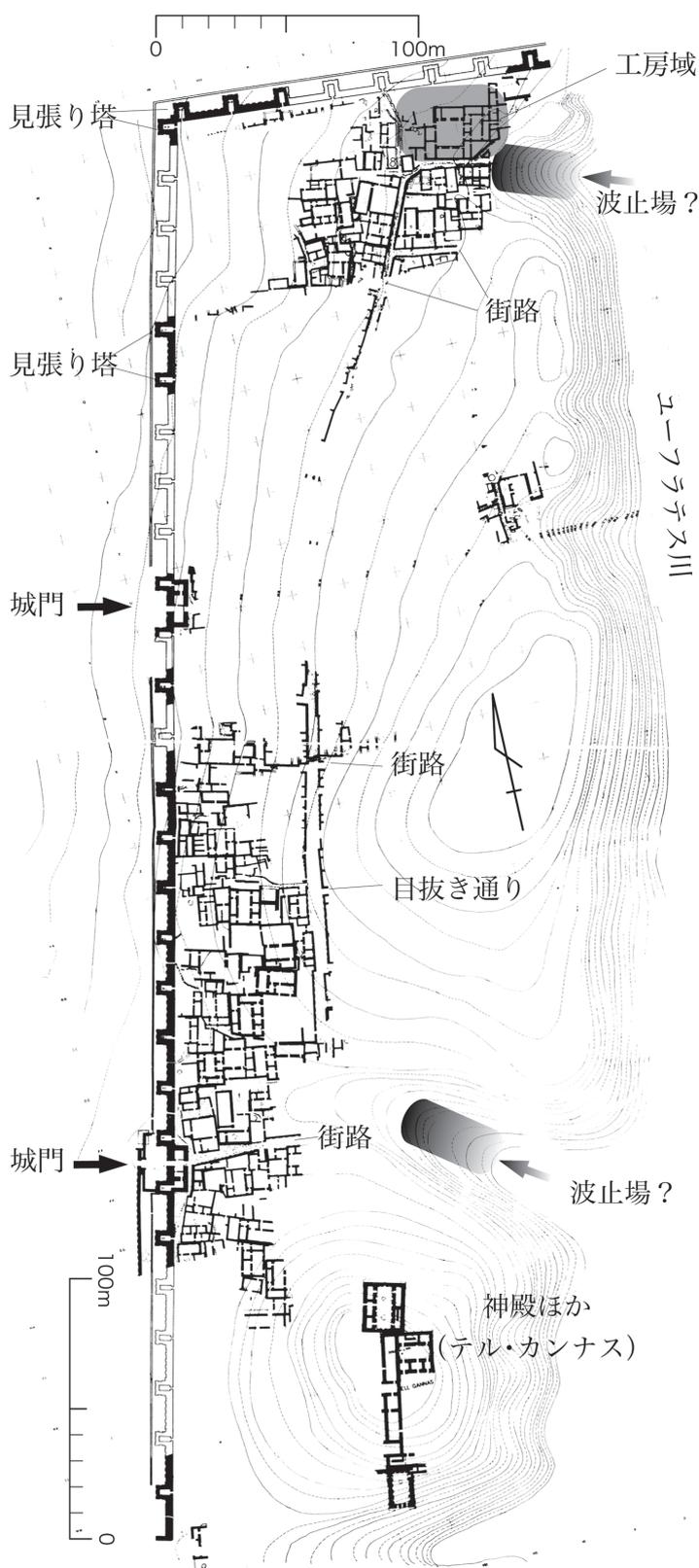


図3 ハブーバ・カビーラ南遺跡  
(Strommenger 1980を改変)

交易拠点 (Handelsstation) と報告している (Strommenger 1980)。

筆者は、川の流路に沿った都市プラン、神殿建築様式、土器型式と器種構成、絵文字的な記号の記された粘土板、円筒印章のモチーフなどの類似性から (Oates 1993: 411)、ハブーバ・カビーラ南はウルクの支配者が主導して建設した模倣都市と想定している (小泉 2016: 24, 2021: 299, 註2)。ハブーバ・カビーラ南の市街地に関する情報にもとづいて、前4千年紀後半のウルクでは行政機構の意思伝達システムとしての絵文字的な記号、祭祀儀礼の場としての神殿建築物が突出しているだけでなく、その都市計画の充実度もある程度復元できると見込まれる。

ハブーバ・カビーラ南は、ユーフラテス川が南流する地形に立地しているため、南北方向に主軸が設定され、街の軸線となる目抜き通りと水利施設が周到に準備されて建設されている<sup>9</sup>。筆者は、ウルクやハブーバ・カビーラ南で見られるように、川の流路方向が街の軸線を決定づけた点こそがメソポタミア周辺における都市計画の根幹であると主張したい。水は高いところから低いところへ流れるという自然の理に従い、川沿いの緩く傾斜した地形を活かして街がつくられ、生活排水が効率良く排出されたと推考される。集住空間としての都市の魅力は快適さにあるという前提に立つならば、下水施設の計画的な配置は街づくりにおいて最重要課題であったといえる。とくに南メソポタミアでは、ティグリス川とユーフラテス川はほぼ北西から南東方向に流れているため、その方向に沿って街の軸線すなわち目抜き通りが設定され、わずかな傾斜を活用して排水設備を工夫したと考えられる。

同時に、南メソポタミアの都市の特徴として、全体プランが平行四辺形に近い形状を示している。前3千年紀末のウルク遺跡では、街の中心部に向かって延びる新バビロニア時代 (Neo Babylonian: 前1千年紀中頃) の目抜き通りが確認されており、先行する時代においても同様に目抜き通りが設けられたと類推される (図4)。ウルクの都市プランは平行四辺形を崩した格好になっていて、川上 (北) 側コーナーは鋭角に設計されている。これは季節的な洪水対策として、上流から押し寄せる洪水による水圧を少しでも回避するための工

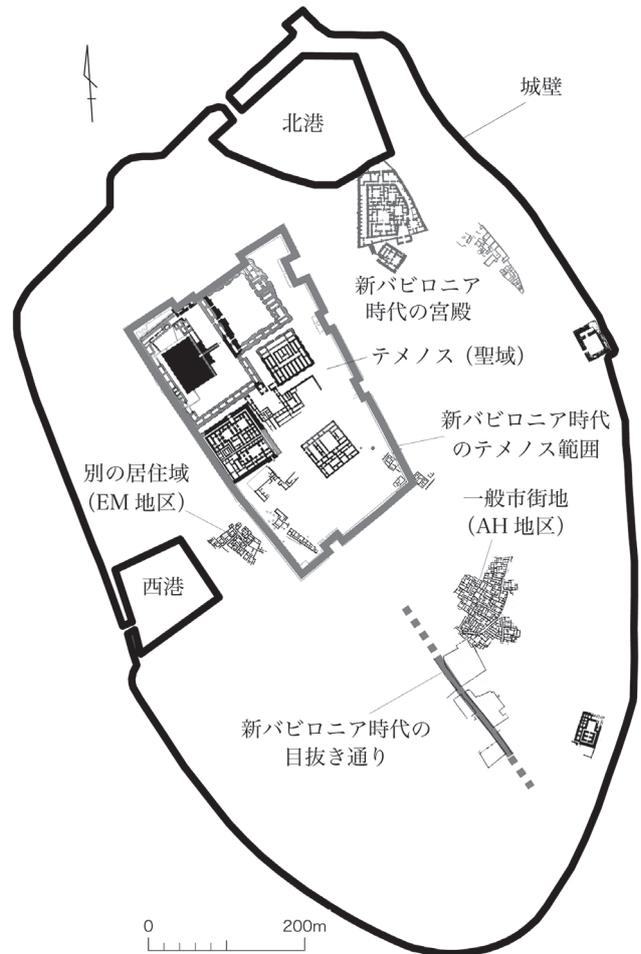


図4 ウルク遺跡

(Woolley and Mallowan 1976より作成)

夫と見られる。類例は南メソポタミアの前3千年紀前半のアブ・サラビーフ (Abu Salabikh) 遺跡にも認められ (図5)、前4千年紀後半の (ウルクを模倣したと推定される) ハブーバ・カビーラ南で構築された平行四辺形プランに酷似している。

限られた資料にもとづくと、近くを流れる川の方向に沿った軸線と、正円あるいは矩形よりも平行四辺形に近い都市プランが前4千年紀以降の南メソポタミアに伝統的であったと考えられる。南メソポタミアとくにシュメール地方は、傾斜勾配がきわめて平坦であり、毎年のように季節的な洪水に晒されてきた。ゆえに、河川流路に沿った都市の長軸方向の設定と鋭角コーナーをもつプランは、メソポタミアの風土に合致した都市計画であったといえる。このメソポタミア特有の都市計画は前1千年紀のバビロン遺跡にも明瞭に継続

<sup>9</sup> 将来的に、水利施設の工程順の推移を層位的に検証できる別遺跡の調査が望まれる。

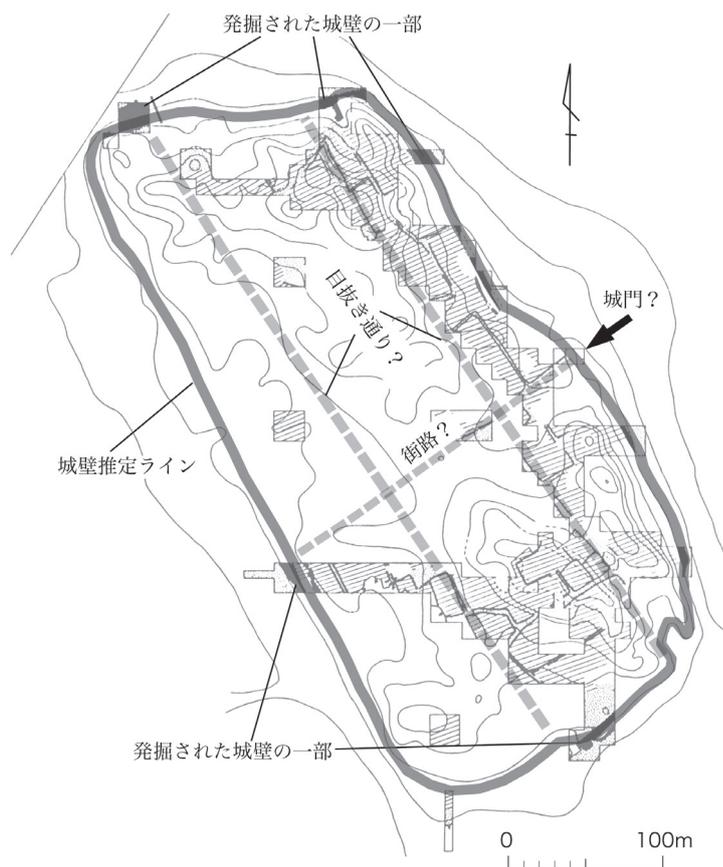


図5 アブ・サラビーフ遺跡  
(Postgate 1990を改変)



図6 バビロン遺跡  
(ロイド・ミュラー 1997より作成)

されている(図6)。

メソポタミアの河川流路の方向性は、おおかた南東に傾斜するメソポタミア平原に起因し、その地形的特性は遙か昔の地質時代に定まった。新生代(約2500万年前)、アラビアプレート(Arabian Plate)がユーラシアプレート(Eurasian Plate)の下に沈み込み、北西から南東方向にザグロス山脈(Zagros Mountains)が隆起し、山脈に沿ってメソポタミア前縁盆地が形成された。第四紀(約258万年前)になると、メソポタミア前縁盆地に砂、シルト、粘土などが流れ込んで堆積し、メソポタミア平原の原型ができあがった(Sissakian 2013: 155-158)。この北西から南東方向に傾斜した平原にティグリス・ユーフラテス両大河が流れ、やがて出現する都市の軸線はおのずとその方向に沿うことになったと推定される。

### 3 都市国家の出現

メソポタミアでは、前4千年紀後半に都市が誕生した後まもなく都市国家が出現した。メソポタミアの都市は都市国家と混同されがちなので、両者を峻別する必要性がたびたび指摘されてきた(Smith 2003; Jennings & Earle 2016; 小泉 2013, 2014, 2016)。ここではメソポタミアにおける都市国家の定義について整理しておく。

都市国家は、前4千年紀末から前3千年紀中頃にメソポタミアのなかでもとくにシュメール地方に展開した政体を指す。その用語はギリシアの「ポリス」(Polis)を由来とし、「シュメール都市国家」(Sumerian city-states)とも表記される。メソポタミアの都市国家は、都市を核とする政体が固有の領土を保持し、たいてい一都市で一国家をなす。なかにはラガシュ(Lagash)のように、複数の都市で一国家を形成する場合もある。

一般的に、国家は都市のように直接的に視認することは難しい。筆者は、都市は有形の遺産として残存するのに対して、国家は概念的な存在であると考えている。メソポタミアの都市国家も、考古資料として認められる都市を核とした政体となり、その存在は研究者

により捉え方が異なる。P. シュタインケラー (Steinkeller) は、南メソポタミアに特徴的な都市国家の起源は前4千年紀のウルク期にまで遡り、適切な情報に欠けているためどのようにして起こったのかは不明であったとしている。もともと南方の都市国家は首都としての都市、周囲に町 (town) や村落を有し、互いに境界を接しており、都市国家間に中立地帯はほとんどなかったという (Steinkeller 1992: 725)。

前3千年紀 (前期青銅器時代) になると、メソポタミア周辺では市街地のほぼ中心に主要施設の密集する城塞が配置された二重構造を特徴とする「城塞都市」 (citadel cities) が顕在化する。城塞都市は A. オッペンハイム (Oppenheim) の命名した特徴的な都市の形態である。支配者の居住する宮殿、宝物庫、軍事司令部、神殿などが街の中心に配置されて内壁により囲まれ、その外側に市民の居住する市街地が外壁で囲まれる (Oppenheim 1964: 130)。城塞都市の典型は前3千年紀末～前2千年紀初頭のウルなどである (図4)。都市国家の全体像はぼんやりしていても、その核となる城塞都市は考古資料として明瞭に視認される。

メソポタミア周辺における城塞都市の起源は、城壁に囲まれた都市的集落に遡る。城塞都市という用語そのものは、近代ヨーロッパのモン・ルイ (Mont-Louis) や北米のケベック・シティ (Quebec City) などの「城郭都市」 (*ville fortifiée*) を連想させることが多い。また、仏語 “*ville fortifiée*” の英訳 “*fortified towns/cities*” はオッペンハイムの呼ぶ城塞都市も含み、さらに城塞都市／城郭都市は東アジア特有の「都城／囲曉都市」 (walled cities) と混同されがちである。このように城塞都市は文脈によって曖昧な用語であるため、本稿での城塞都市はメソポタミア周辺におけるオッペンハイムの定義した二重構造の都市に限定している。

メソポタミアにおいて、城塞都市のような首都をもつ都市国家の存在は、その支配者である王と治世年について記された「シュメール王朝表」 (以降、王朝表とする) などの読解により推考されてきた。王朝表には、前3千年紀から前2千年紀初頭にかけて南メソポタミア (バビロニア地方) で覇を唱えたとされる王朝名、支配者名、治世年がおもに粘土板や土製角柱・円筒碑文等に記されている。

現在、主要な王朝表として16点の史料が確認され、

大部分はニップル (Nippur) 遺跡などで破片の状態出土している (Sallaberger & Schrakamp 2015: 15-16)。なかでもラルサ (Larsa) 遺跡で出土したとされるウェルド・ブランデル (Weld-Brundell) 粘土製角柱碑文 (clay prism) は、最も残存状態の良好な (ほぼ完形の) 史料である (Ashmolean Museum AN1923.444)。同碑文は高さ20cm、幅9.1cmであり、意図的に焼成され、イシン・ラルサ時代 (Isin-Larsa period: 前1800年頃) に制作されたと推定されている。

こうした王朝表の読解にもとづき、都市の統治者である王の支配した王朝が時系列に沿って復元されている。ただ、王朝表には明らかに現実離れた治世年数が記されているため、その史料読解には注意を要する。例えば、ウェルド・ブランデル角柱碑文の冒頭には次のように記されている「王権が天から降り、王権はエリドゥにあった。エリドゥでは、アルリム (Alulim) が王となり、28,800年間治世し、アラルガル (Alalgar) が36,000年間治世し、両王は64,800年間治世した」 (Langdon 1923: 8, Col. 1.1-7)。アッシリア学者 (メソポタミアの楔形文字研究者) は、王朝表の治世年数は極端に誇張されているものの、王名と順序は他の史料と照合しながら有益な情報になると解釈している。

王朝表に記された王朝は、シュメール地方の諸都市国家を直接的に支配したのではなく、都市国家間の戦争を通して相対的に優位に立った政体を示すと筆者は考えている。前4千年紀末から前3千年紀中頃にかけてシュメール地方の都市国家は都市を中心とした小規模な実効支配域に留まっていた。まもなく前3千年紀後半にアッカド王朝 (Akkadian Dynasty) が諸都市国家を支配し、領域国家 (territorial states) として支配域を拡大した。断絶をへて前3千年紀末になると、諸都市国家を支配したウル第3王朝 (Third Dynasty of Ur) が度量衡を統一して、いわゆる中央集権国家 (centralized states) が出現した。前2千年紀中頃以降、領域国家の国際的な競合状態 (オリエント世界の国際化と称される) をへて、前1千年紀には新アッシリア (Neo Assyrian) に代表される帝国 (empires) が登場した。それぞれの国家形態は研究者によって多様に解釈され、見解は統一されていない。たいてい当該期の諸社会はそれぞれの王朝名で議論されてきている。

そもそも、前3千年紀から前2千年紀初頭にかけて

のメソポタミアにおいて、都市を意味するシュメール語“iri/eri/uru”やアッカド語“ālu”に対して<sup>10</sup>、都市を核とした都市国家に相当する語は不明である。いわゆる国土の意としては、シュメール語“kalam”およびアッカド語“mātu”が相当する。前3千年紀後半、都市国家から領域国家へ推移すると、都市国家ウンマ(Umma)出身の王ルガルザゲシ(Lugalzagesi)などは新たな王号「国土の王」“lugal-kalam-ma”(king/lord of the land)を用いた。“kalam”は個々の都市(国家)の支配域を越えた領域としてのシュメール地方を指す。その覇者は領域支配を正当化するために、「甘い水」(甘口の赤ワインと推定される)を注いだと碑文に記されているように、メソポタミア全土の神エンリル(Enlil)<sup>11</sup>の祀られたニップルの神殿で灌奠(特別な液体を注ぐ儀式)を執行した(Frayne 1998: E.1.14.20.1; 小泉 2021: 302–303)。

ここでの覇者とは、文字通りシュメール地方を直接的に支配することに成功した人物である。これらの史料の読解によると、領域国家の登場する頃までにメソポタミアでは特定の“iri”の支配する広大な領域が“kalam”として認識されるようになったようだ。この領域国家あるいは都市国家は現代の目線で捉えられた概念であり、研究者によりさまざまに解釈される。とくに都市と都市国家の違いとして、筆者は国家的な機能の可視化された考古資料に着目しており、領域を示す境界石、街の神殿の輪郭線をモチーフにした都市記号、支配者としての王の住まいとなる明確かつ本格的な宮殿をもってして都市国家の出現と定義している(小泉 2016: 182–188)。

メソポタミアにおいて、都市国家の存在を示唆する最も明白な証拠は都市記号と考えられる。ジェムデット・ナスル期(前4千年紀末)になると、ウルク以外の都市の急成長に伴い、都市を軸として固有の支配域を有する政体すなわち都市国家が競合するようになり、各都市国家の顔となる都市を互いに認識するための記号が考案された(小泉 2001: 179–180)。R. マシューズ(Matthews)が指摘しているように、都市の中心に建立された神殿がランドマークとなり、基本的に神殿とその基壇の輪郭を抽象化した図形が都市記号(都市シンボル)になった(図7)。例えばウルの都市記号は、

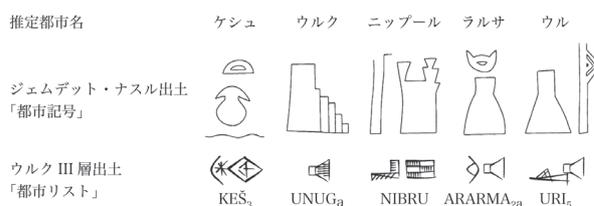


図7 都市記号  
(Matthews 1993より作成)

基壇上に建つ神殿の輪郭とともに神殿入口の門柱が抽象化されている。実際の神殿で一對に設置されていた門柱は、記号では片方だけに簡略化され、先端に旗が付けられている。シュメール語の都市名“uriki<sub>25</sub>”(ウル)は、都市記号の“urin”(門柱)が由来となっている(小泉 2016: 188–192)。

## IV 都市化素描

つぎに、メソポタミアにおける都市化とその到達点である都市の誕生について、前述のメソポタミア周辺に限定した都市化の3指標(都市計画、行政機構、祭祀施設)を軸にして、よそ者と絡めながら考古資料を時系列に辿ってみる。以下、都市化から都市誕生にかけての拙稿を振り返りつつ、メソポタミア周辺におけるウバイド期(都市化前半)からウルク期(都市化後半)にかけての都市化を素描しなおす(小泉 2001, 2010, 2016)。

### 1 快適な街づくり

ウバイド期(前6千年紀中頃～5千年紀)において、一般集落はランダムに見える建物配置が目立ち、一定の計画性を見出すことは難しい。生活排水の処理に関する水まわりの遺構は各地で確認され、中部メソポタミア(イラク)のテル・ソングル(Tell Songor)遺跡B号丘II層、テル・アバダ(Tell Abada)遺跡I層では、住居や公共施設を建てた後に空閑地に土管を埋めた排水施設がつくられた(Matsumoto & Yokoyama 1995; Jasim 1985)。また、北メソポタミアのテル・サラサート(Tell el-Thalathat)遺跡II号丘XIII層、北シリアのテル・コサク・シャマリ(Tell Kosak Shamali)遺跡A14–13層などでは、集落端に緩く曲がった溝状遺構

<sup>10</sup> それぞれ“village, town, city”の意味もあるため、文脈によって使い分けられる。

<sup>11</sup> メソポタミアでは神々の世界でもトップの交代があり、領域国家段階になると当初のアン(アヌ)からエンリルにその座が移ったとされる。

が配置され、集落内への浸水防止や湿気対策として利用されたと推察される (Fukai et al. 1970; Nishiaki & Matsutani (eds.) 2001)。類例はテル・ソンゴル B 号丘 I 層でも認められる。概して、ウバイド期の集落では建物がつくられた後に空閑地に排水関連の土管が設置され、溝は短い区間に限定されていた (環濠ではない) という点で共通している。

同時に、河川沿いの微高地に立地したウバイド期の集落において、上水利用に関する興味深い例が確認されている。筆者の調査してきたティグリス川上流域にある南東アナトリアのサラット・テペ (Salat Tepe) 遺跡では、約 7 千年前の一般住居址において井戸も検出した (図 8)。目の前に川があるにもかかわらず、井戸が掘削されていたことより、すでにウバイド期において、上流の集落から流される生活排水や動物の糞尿などの混じった川の水をそのまま上水として利用できなかったと推定される。

ウルク期になると、特徴的な遺構として集落を護る壁が現れる。ウバイド終末期に発生したよそ者の中には、よからぬ考えをもつ「ならず者」(rogue) が余剰食糧を豊富に保管する集落を襲う事態が起きたと想像され、ウルク期初頭までに集落の防御施設が求められていったようだ。現状において後続期 (ウルク中期以降) に普及する銅製武器が現れていないことから、集落間の争いというよりもならず者対策として防御に徹した施設 (本格的な城壁の前身) が最初に構築されたと推考している。都市は住民の安全を保障する空間でなければならない。都市民に安心感をもたらすためにも、外敵からの攻撃に耐えられる壁は必須である。今のところ最古級の防御用の壁はウルク前期にテル・ブラク遺跡で検出され、幅 2m の日干しレンガで構築され、門も確認されている (Oates & Oates 1997: 287-289)。その後、ウルク後期の段階になると、先述した



図 8 サラット・テペ遺跡ウバイド期住居・井戸  
(筆者撮影)

ようにハブーバ・カビーラ南で本格的な城壁が登場する。

同時に、集落内に溝や街路が設けられて空間利用の専門分化が進んだ。ポスト・ウバイド期 (ウルク前期併行) のテル・コサック・シャマリでは当時の人口規模は不明であるものの、溝によって集落中心の居住域から土器工房域が隔離された (Koizumi & Sudo 2001)。テペ・ガウラではウバイド期の一般住居には土器工房が融合し、すぐそばに神殿も建てられ、集落内の建物配置はランダムに見える。ところが、ウルク中期頃までに集落内に街路や市門が設定された。とくに、テペ・ガウラ VIII 層 (ウルク中期後半併行) では、中央に指導者の館が配置されるなど区画ごとに性格の異なる建物がつくられ、計画的な街並みづくりが萌芽していった様子が観察されている (Tobler 1950; Rothman 1994: 107-108, 2002: 127-142)。

ウルク期を通して、空間利用の専門分化が進行し、ウルク後期には街の区画化がかなり充実してくる。同期のハブーバ・カビーラ南では、街路で区画された街の北東端に土器工房や冶金工房が設置された (図 3)。現在、遺跡の立地する周辺ではおもに南から西寄りの風が吹くため、古代においても同様の風向きであったと想定すると、街の風下に工房域が設けられたことになる。工房では麦藁や牛糞などの燃料も使われたと想像され、不快な煙や臭いの問題が生じる。快適な空間づくりのために、ハブーバ・カビーラ南では居住域のある街の中心や風上は避けて、風下に工房域が設置されたと考えられる (小泉 2016: 24-26)。

さらに、街の区画化とともに、水利施設の拡充も都市化の指標として注目される。上述したようにウバイド期の一般集落では住居などを建てた後で空閑地に土管が設置され、排水用の施設が後付けされた。この工程順はウルク前期のテル・ブラクや同中期のテル・シェイフ・ハッサン (Tell Sheikh Hassan) などにも継続したが、ウルク後期までに順序が逆転する。ハブーバ・カビーラ南では、まずユーフラテス川に沿ったほぼ南北方向に幅 10m の目抜き通りと東西に直交する 2 本の大通りが建設され、つぎに溝を掘って下水用の土管を埋めた水利施設が張り巡らされ、これらを整地した後に各種建物がつくられた (Strommenger 1980)。

以上の検討にもとづくと、すでに都市計画の諸要素は都市化段階において明瞭に遺構面に現れていたことがわかる。都市化の帰結点として、都市では本格的な城壁により住民の安全・安心を保障し、風下に工房域

を配置することで不快感を軽減し、排水施設の拡充により水まわりを工夫していた。メソポタミアの都市では、都市化において進展してきた都市計画により快適な街づくりが実践されたといえる。

## 2 緊張関係と交易

メソポタミア周辺において、ウバイド期にテル・アバダ、テル・ソングル Bなどで一般住居のほか公共施設が建てられ、テベ・ガウラでは神殿もつくられた。しかし、ウバイド期の集落ではこうした公共的な性格の建築物のほかにとくに目立った遺構は検出されず、一般住居と明らかに区別される指導者の館は見当たらない。先述したように、ウバイド期には画一的な建築様式や墓制が各地に普及し、そこには社会的格差や緊張状態を見出しがたく、平等主義的な社会が展開していたと考えられる。

ウルク期になると、軍事的な性格も含めた行政機構に関連するさまざまな遺構・遺物が現れる。先に触れた防御用の壁や目抜き通りとともに、ウバイド期に比べて新たな性格をもつ施設などが目立ってくる。ここでも、ウルク期初頭までに起きた海水面の上昇によるよそ者の発生、ならず者の進入が大きく寄与していたと考えられる。先の都市計画においていち早く反応した防御目的の壁と連動して、軍事的な要素が現れたようだ。テベ・ガウラ XII(ウバイド終末期)～XIA層(ウルク前期併行)では、集落入口に配置された軍事施設、簡便な武器としての土製投弾などがそろって登場し、それまでのウバイド期における平等主義的な性格と異なり、争いや対立の側面が浮彫りになってくる(Tobler 1950)。

ウルク中期後半になると、北シリアのユーフラテス川上流域に立地するテル・シェイフ・ハッサン遺跡は幅3mの日干レンガの壁によって囲まれ、この防御施設に隣接した堅牢な建物(武器庫)から銅製の槍先・短剣が出土している(Boese 1995)。ウルク後期には、上述したように同流域のハブーバ・カビーラ南は城壁で囲まれ、武器としての銅斧が出土し(Strommenger 1980)、さらに上流のアルスランテペ(Arsalantepe)遺跡でも武器庫とおぼしき建物(Building III)から銅製の剣と槍先が集中して見つまっている(Palmieri 1981)。同じ頃、北メソポタミアのニネヴェ(Nineveh)遺跡では銅製の鍔あるいは槍先が出土している(Thompson & Mallowan 1933)。

銅冶金に関して、南東アナトリアのハジュネビ

(Hacinebi)遺跡では、ウルク期前半に在地の銅器生産の専門化により、鑿などの日用品やピンなどの装飾品が製造された。約200km離れた産地の銅鉱石を搬入して銅インゴットが製造され、メソポタミア方面に輸出されたという(Özbal et al. 2000)。ハジュネビでの銅冶金の状況や、アルスランテペで認められる銅製武器の出現時期を勘案すると、少なくとも南東アナトリアではウルク後期までに銅製の武器が本格的に開発されたと推定される。

こうした事例から、ウバイド期末からウルク期初頭にかけてのよそ者の進出が引き金となって地域間の緊張が高まった可能性が見えてくる。筆者は、よそ者の一部がならず者と化したという仮説にもとづいて以下のシナリオを考えている。余剰食糧の豊富な集落を脅かす事態に備えて防御用の壁がつけられた段階では、あくまでならず者対策として防御に徹していた。まもなく集団間の緊張関係から小規模戦闘(小競り合い)が起きたと見られるが、本格的な戦争の明確な証拠に欠ける。ウルク中期後半から後期になると、市/市場や交易の活性化により外部集団との接触がいっそう増え、ならず者対策としての壁だけでは集落を防御しきれなくなった。そこで、銅製の槍先・剣・鍔などの武器が自ずと求められていったと推考される。

同時に、上述のテル・シェイフ・ハッサンやアルスランテペなどでは軍事施設や武器に留まらず、活性化された交易活動を示す円筒印章、印影のある土製ブツラ、各種トークンなども認められ、ウバイド期とは異なる様相が現れている。とくにウルク中期後半以降、メソポタミア周辺では従来の舟を用いた水上交通に加えて、土器づくりにおける高速回転のロクロ盤から応用されたと見られる車輪の発明とロバの家畜化により陸上交通手段が整い、広範な交易ネットワークが展開した(小泉 2001: 123-141, 2016: 91-94, 155-159)。ウルク期を通じた交易活動の進展において、故地を離れざるをえなくなったよそ者や以降の外部集団が物資運搬の役割も積極的に担うようになったと考えられる。

よそ者の発生以降、異質なモノや人が接触する機会が増えると、鍵(ドア封泥)付きの大型倉庫、それを管理する指導者の館、広場に立つ市などが出現する。ドア封泥そのものは、南東アナトリアのディルメンテペ(Değirmentepe)7層、北メソポタミアのテベ・ガウラ XII層、南イランのタル・イ・バクーン(Tall-i Bakun) AIII層などのウバイド終末期に登場した(Esin 1994; Rothman 2002; Alizadeh 1994)。ドア封泥

は、木製の片開きドアに通したロープ状の紐を倉庫壁面に打ったペグ(杭)に縛ったり、両開きドアの取っ手に紐掛けしたりして、紐の結び目に泥で封をして、そこに判子を押しした封印装置となる(図9)。

もともとウバイド期では、集落構成員の協働により収穫されたムギ類などの余剰食糧が、集落に建てられた公共施設や神殿の脇室、小型の独立した倉庫などに供託され、倉庫には鍵はかけられておらず自由に出入りできた。ウバイド終末期以降、よそ者が比較的余裕のある都市的集落に共存するようになると、価値観の違いから勝手な物品の持出しなどの問題が生じたと思像される。トラブルを抑止する目的で倉庫に鍵がかけられるようになり、ドア封泥付きの倉庫に余剰食糧が財として集中的に管理され、適宜ほかの物品と交換されていったと推定される。

ウルク期を通してドア封泥が利用され、倉庫の規模が大型化した。テペ・ガウラ VIII 層(ウルク中期後半)では、集落中央に建てられた一辺10m 前後の独立した大型倉庫に、遠隔地から搬入された黒曜石の原石とともに石核やほぼ未使用の石刃も保管された(Rothman & Peasnell 2000)。同時期のテル・シェイフ・ハッサンでもほぼ同規格の独立倉庫が確認され、ウルク後期のアルスランテペやハブーバ・カビーラ南でもドア封泥が認められる。封泥を壊して倉庫から物品を持ち出し、その後ふたたび封印に用いた判子の持ち主こそ、集落における意思決定の鍵を握る指導者であった。テペ・ガウラ VIII 層の独立大型倉庫に隣接した建物は、倉庫を管理する指導者の館と推考される。ウ

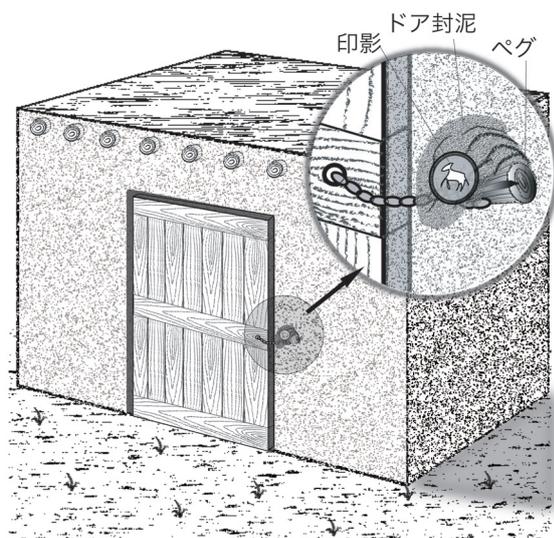


図9 ドア封泥模式図  
(筆者作成)

ルク期における行政機構の特徴は、封印した倉庫を特定の個人が管理する体制に推移していたという点にある。

さらに、この大型倉庫に面した広場から印影付の封泥が出土した。その胎土が理化学的に分析された結果、在地系粘土だけでなく遠くイラン方面の搬入系粘土も検出されたことから、この広場は指導者の管理下においてさまざまな物品取引の市/市場として機能していたと考えられている(Rothman 1994)。印影のモチーフとして、在地系粘土の封泥にはヤギが頻繁に表現されたが、搬入系粘土の封泥にはスイギュウやヘビなどの南メソポタミア周辺と関連づけられる動物が目立つ。テペ・ガウラではVI層(前3千年紀:前期青銅器時代)でも集落中央の部屋群(Rooms 469, 676ほか)が倉庫として機能し、印章、銅製品、ビーズ類などの取引によって入手された物品が保管され、隣接する広場が市として機能したとされる(Crawford 1992)。

上述のハジュネビでは、ブッラや印影の胎土分析により計9タイプのうち6タイプが在地系とされ、少なくとも2タイプは南西イランのスーサ遺跡やフーゼスターン地方から搬入された可能性が指摘されている(Blackman 2000)。またハジュネビ B2層(ウルク中期後半)で在地系土器とスタンプ印章の印影、ウルク系土器と円筒印章の印影が別々の区画に集中している(Stein 2000)。両区画では各様式の調理用・貯蔵用土器が出土し、容器の封に押されたスタンプ印章の印影は先行する在地系文化から継続したものであり、ブッラや粘土板などに押された円筒印章の印影はスーサなどの南メソポタミア周辺のウルク文化に関連するとされる(Pearce 2000; Pittman 2000)。

こうした資料から、ハジュネビでは地元民と南方からきた外部集団(先によそ者と異なる)が別々の区画で居住し、それぞれの行政機構に則った取引を対等に行っていたようだ。おそらくハジュネビで見られる出身の異なる集団が別々の区画で共存する状態は、すでにウバイド終末期によそ者が発生した頃から始まっていたと思像される。

くわえて、西イランのゴディン・テペ(Godin Tepe)遺跡V層(ウルク後期)では、幅1mの周壁に囲まれた集落から数字粘土板、円筒印章、ブッラ・粘土栓などの各種封泥が出土した。集落中央の約10m四方の広場を挟んで、周壁の門と対面して建物(room 18)が位置する。同建物の出入り口は広場と反対側に設けられ、広場に面した側には大人の腰ほどの高さに

2つの窓が配される。建物床面からレンズマメ、オオムギ、ワイン壺、ビール壺片、銅器（ピン、針、鳥形製品）、石製ビーズ類などが検出されたことより、同建物は取引所としての機能を果たしていたとされる（Badler 1996）。

したがって、都市化後半段階から都市誕生段階に相当するウルク期のテペ・ガウラやゴディン・テペなどの都市的集落では、居住域の中央（奥深く）に配置された広場において、居住者とよそから来た商人との間で交換が行われたと推定され、これは最古級の市／市場の例となる。都市になると、ハブーバ・カビーラ南では城内（10m四方程度）やその外側に広場が設けられ、外部からの商人・旅人が出入りする場で都市居住者と外部者が取引をしていたと想像される。交換の場として、都市的集落の居住域中央の広場と、都市の城門付近（都市入口）の対外的な市／市場との差が明瞭である。後者の配置は自然発生的なものなのか、あるいは都市支配者による意図的な隔離なのかを検討していく必要がある。

### 3 政治支配化

メソポタミア周辺では、前4～3千年紀の都市において主神の祀られた神殿が最も重要な施設であった。主神に代って日々の統治を任されたのが都市の支配者（都市段階の指導者、都市国家段階以降の王）であり、当時のメソポタミアの都市では主神のための祭祀儀礼を行う神殿が支配者の暮らす居所や宮殿よりも重視される傾向にあった。神殿の起源は前5千年紀のウバイド期に遡り、ここでは墓制の変遷から祭祀儀礼を執り行う祭司の置かれた状況の推移を辿ってみる。

ウバイド終末期になると、墓制の諸点において明白な変化が各地で現れた。北シリアのテル・カシュカシヨク遺跡では、共同墓地で特定の構造の墓に棍棒頭などが副葬された（Koizumi 1991）。南メソポタミアのウルでは、棍棒頭にくわえて磨斧や槍先などが副葬品として検出された（Woolley 1955）。南西イランのハカランやパルチネの共同墓地では棍棒頭や磨斧が副葬された（Haerincx & Overlaet 1996）。同地方のスーサの共同墓地では銅製の斧や穿孔円盤などが副葬され、被葬者は祭司であった可能性が指摘されている

（Hole 1983）。これらの遺物はいずれも非日用品であり、威信財としての機能をもっていたと見られる（小泉 2001: 47-50, 2016: 86-87）。

同時に、集落内にさまざまな性格の施設が建てられていった。テペ・ガウラ XII 層では公共施設だけでなく見張り台もつくられ、集落の空間利用が多様化する（Tobler 1950）。とくに公共施設には練土囲いという特異な構造の墓が集中する。本遺跡において練土囲いの構造はウバイド終末期に本格的に普及し、もともと南方のウバイド期に流行っていたレンガ囲いの箱形堅穴墓が北方に伝わったものと推定される。

以上の墓制の変化を整理すると、ウバイド終末期以降の共同墓地では共同体の庶民が埋葬されつつ、墓の構造や副葬品に差がつけられていった。まず、共同墓地における墓の構造上の違いは、先述したよそ者との共存により起きた墓制の多様化が原因であったと考えられる。つぎに、共同墓地における威信財の採用は、旧来の平等主義的な構成員の人間関係に格差が生じていった様相を示唆し、スーサで見られたような祭司の墓に威信財が副葬されている。また、テペ・ガウラで観察されたように、集落内における特定の空間と特殊な構造の墓の関連は、被葬者の社会的な役目をことさらに強調している。

こうした墓制の変遷は、平等主義的な社会が徐々に変質し、格差の増長された社会<sup>12</sup>になった様子を反映していると考えられる。筆者は、コミュニティにおいて単なる役割に留まらない階層化された社会的な地位が特定の人物に付与され、その候補として祭司個人を推定している。ウバイド終末期からウルク期初頭にかけて、従来の祭司集団による統治から祭司個人による支配へ緩やかに変化し始めたと考えている。被葬者の年齢に関しては、先行期と同様に共同墓地に成人、居住域に小児がそれぞれ埋葬されるという差異が継続していることより、世襲的な役割や地位の受け渡しが未熟な段階であったようだ（小泉 2001: 53-55, 58-60）。

墓制以外の点においても、新たに現れた個人指導者の存在を読み取れる。ウバイド期には互いの信頼関係にもとづいて余剰食糧を供託していた倉庫は、上述したようにウバイド終末期以降、ドア封泥によりアクセスが制限された。当初ドア封泥に押す判子を所有して

12 拙稿（2001）では「首長制的な性格」と記したが、査読者のご指摘や近年の首長制モデルに関する議論の動向を勘案して修正した。また、首長制の首長とは異なる指導者という意味合いで「首長級の指導者」を用いたが、曖昧な表現であったので本稿では「指導者」としている。以下、とくに補足説明のない箇所では、かつて筆者が記してきた「首長」を「指導者」に置き換えている。

いた人物は祭司集団のなかの特定個人であったと考えられる (小泉 2016: 87-89)。

ウルク前期になると、テベ・ガウラ XIA 層では神殿域にレンガ囲いの墓がつくられるものの、後続の XI 層にかけて神殿以外の建物に関連した墓に特異な構造や際立った副葬品が観察される。とくに、XI 層では指導者の館とされる建物に関連した土壙墓 Locus 142 に棍棒頭や金製品が副葬され、祭司以外の世俗的な指導者が埋葬されたと見られる (小泉 2001: 67-68)。同遺跡 X 層 (ウルク中期前半併行)、東端部に密集するレンガ囲いの墓群では、豊富な金製品を主体としてラピス・ラズリや黒曜石の石核など輸入品が副葬され、被葬者は交易活動も仕切っていた指導者と推定される。そして VIII 層 (ウルク中期後半併行) になると、集落内の倉庫に隣接する広場にあるレンガ囲いの墓 Tomb 31 に各種金製品、石製ハット・シンボル、石製容器、象牙製印章や櫛などが副葬された。ウルク期のテベ・ガウラにおけるこれらの被葬者は、倉庫の管理や市／市場の運営などを担当した指導者と推考され、コミュニティにおける持てる者と持たざる者の社会的格差が顕著になっている。

総じて、ウバイド終末期の段階に比べてウルク期には祭司以外の人物が目立ってくる。限られた資料ではあるが、墓制などの観察にもとづいて、筆者はウバイド終末期からウルク前期にかけて祭司の役割の変遷と新たな職掌の登場について以下のように捉えている。ウバイド終末期以降、よそ者との共存により、余剰食糧の持ち出しなどで問題が生じ、苦情相談を請け負う役目が特定の祭司に任せられていったと推測される。もはや従来のパートタイム的な祭司たちに導かれた祭祀統合の緩いつながりではコミュニティを維持することが難しくなったため、特定個人の指導力によりまとめるという新たな仕組みが求められたと推考される。ウルク前期のころになると、コミュニティにおいて祭司以外の職掌の人物が登場し、こうした世俗的な立場の個人の役割が社会的地位へ高まりつつ、その社会的格差が明確になり、新しい秩序すなわち政治的な支配の構図が形成されていったと予察している。

## V 都市化、都市、都市国家

前章で描写したように、メソポタミア周辺の都市化において、ウバイド期 (前 6 千年紀後半～5 千年紀) に平等主義的であった社会が、よそ者の影響によりウルク期 (前 4 千年紀) に格差や階層化を特徴とする社会へ推移したと推定される。筆者は、社会的格差の拡大するなかで、ウルク後期 (前 4 千年紀後半) にさらなる外部集団に触発された本格的な都市化が引き金となり都市が誕生し、すでに都市に備わっていた国家的な要素が発芽して、ジェムデット・ナスル期 (前 4 千年紀末) に都市国家が出現したと考えている。本章ではメソポタミア周辺における都市化と都市について垂直方向の階層性と水平方向の多様性<sup>13</sup>の切り口で考察し、近年の研究動向を踏まえながら都市と国家を論ずる。

### 1 遺跡間と遺跡内の階層性

都市は、持てる者と持たざる者の格差を内包しつつ、ほかの集落との関係においても明確な格差を有する。メソポタミアにおいて、都市の周辺では多くの村落が展開して都市の繁栄を支えていたと見られる。都市の支配者層は市民の上に君臨するだけでなく、都市そのものを維持するために、周辺の村落から多くの余剰食糧や社会余剰を吸い上げる構造を創出していったと考えられる。都市と周辺村落についての関係は、遺跡間の階層性として捉えることができる。

メソポタミア周辺の遺跡間の階層性について、先に紹介したアダムズ、ジョンソンらによるシュメール地方やスシアナ平原のサーヴェイ成果にもとづいた 4 遺跡階層モデルの登場以降、セトルメントパターン研究が主流となっている。しかし、遺跡間の階層性と社会的な格差、権力の強弱の相関性は良く分かっていない。先行する都市化段階 (ウバイド期) において、遺跡の大小とその機能は決して相関していないというずれも指摘されている (Wright & Pollock 1987: 321-324; 小泉 2016: 58-59)。

近年の調査の成果にもとづいた研究として、従来の新進化論的な発展プロセスからの脱却を目指した多様な都市性 (urbanism) の起源も提言されている (Lawrence & Wilkinson 2015: 328)。もちろん、先述し

13 広義の並列性 (heterarchy) も含む。

たようにサーヴェイの手法には未解決の問題も含まれることに留意しつつ、メソポタミア周辺における遺跡間の階層性についての新知見として紹介してみる。

D. ローレンスと T. J. ウィルキンソンは、現在の北シリアから南東トルコをへて北イラクにいたる北メソポタミアに起きた都市化を後期銅石器時代（前4400～3000年）と前期青銅器時代（前2600～2000年）に区別して比較検証している。旧来の通文化的な法則を求めるのではなく、特定の時期・地域における社会的・政治的発展の特質を見出すことで、結果的に異なる複雑さの発現につながる多様な道筋を推定できるとしている（Lawrence & Wilkinson 2015: 329）。

彼らによると、後期銅石器時代までに出現した大規模センター（50ha以上）と小規模センター（約10～20ha）は、工芸品の専業生産、記念碑的な建造物、長距離交易を特徴とするという。こうしたセンターは、地域的な交換および在地の政治ネットワークにおける「拠点」（hubs）であり、都市そのものよりも「アグロ・タウン」（agro-town）に近いとしている。そして、センターを中心として同じような規模の小集落が取り囲む2遺跡階層が認められ、千年かけてその集落密度が徐々に増加していき、センターの規模と後背地に展開する小集落の密度の間には強い相関があると主張している（Lawrence & Wilkinson 2015: 329-333, 342）。

一方、「第二都市革命」（second urban revolution）とも呼ばれる前期青銅器時代の都市化は、P. M. M. G. アッカーマンと G. M. シュバルツが指摘しているように「都市生活と関連する組織の本格的な享受」を含むとする（Akkermans & Schwartz 2003: 233; Lawrence & Wilkinson 2015: 333）。つまり、よそで完成されていた都市の在り方が当地に移植された格好になっている。

ローレンスとウィルキンソンは、前期青銅器時代の都市化において北メソポタミア周辺の都市センターは後期銅石器時代の数倍（40～120ha）に拡大し、大型公共建築物や城壁、土器・石器・織物といった工芸品の大量生産や社会的分化の証拠が見られ、文字記録システムが当地に初現して、政治的な事象や社会経済的な組織の再構築が可能になったとしている。都市センターには標高の高い小丘に宮殿や記念碑的な建物が配置され、その周囲の低地には城壁で囲まれた一般市街地が広がる。この形態は本稿で言及する城塞都市を特徴とする。彼らは、その頃に北メソポタミアの一部で認められる3遺跡階層（センター、中規模集落、村落）

は一般化されるものでなく、後期銅石器時代の場合と違ってセンター周辺の集落密度とセンター規模の間に明確な相関がなくなり、地域的な人口密度は都市発展において重要な要素ではないとしている（Lawrence & Wilkinson 2015: 333-334, 337-338）。

彼らによると、後期銅石器時代と前期青銅器時代の都市化の相違として、後者の進行速度が急激であり、前3千年紀の中頃わずか200～300年の間に起きたという（cf. Lawrence et al. 2016）。そして多くの集落は、壊滅的な気候変動、食糧供給の構造上の不安定、南メソポタミアからの侵略による治安悪化、新たな文化的集団の登場といった諸要因により急激に衰退したとしている。彼らは、後期銅石器時代の都市化で徐々に成長した拠点集落と区別して、急速に都市化した前期青銅器時代の集落を「新興（upstarts）集落」と呼び、地域内の小集落から集中した人口により成長した内因性の集落（endogenous upstarts）と、地域外から流入した人口により形成された外因性の集落（exogenous upstarts）に細分している。新興集落の出現の背景として、大規模なヒツジ・ヤギの家畜を主体とする織物生産と交易の活性化を示唆している（Lawrence & Wilkinson 2015: 334-337）。

同時に、都市と後背地（hinterland）の関係は、メソポタミア周辺の都市をめぐる議論において継続的なテーマである（Adams 1965, 1981; Adams & Nissen 1972; Smith 2003; McMahon 2020b）。かつての自給自足型の農業を基盤とする一般集落と異なり、よそからの食糧調達により都市が成り立つ場合、都市経済を支える周辺集落が後背地を形成する。A. マクマホンが指摘しているように、メソポタミア周辺における都市と後背地などの複雑な関係の検証は偏った証拠に基づいている。都市そのものは集中的に調査されるのに対して、小集落はほとんど発掘されていないため、都市と後背地の複雑な関係はサーヴェイにより取り込まれているに過ぎない（McMahon 2020b: 296）。

つぎに、遺跡内の階層性に関して、メソポタミア周辺のフィールドにおいて盛んに議論されてきたのが首長制である。都市の誕生をめぐる社会構造の変化について、旧来のサーリンズとサーヴィスの唱えた首長制、あるいはアールの首長制モデルで捉える傾向がある。概して、首長制モデルそのものの批判検証は他の地域

に比べるとメソポタミア周辺のフィールドでは活発でない印象があり<sup>14</sup>、いまだにウバイド期に首長制の証拠が見られるとする論調が目立つ。

マクマホン<sup>15</sup>は、前4千年紀後半のウルク期に南メソポタミアで初期国家が成立し、先行するウバイド期には首長制を識別するいくつかの特徴が現れていたとしている (McMahon 2020a: 33)。彼女によると、2階層性のセトルメントパターン、土器の専業生産、テル・エル=ウェイリ (Tell el-'Oueili) の大型建物、エリドゥの神殿、テル・アバダの推定首長館、高まる所有権の重要性を示すスタンプ印章などが首長制を表すという。ウバイド期の首長制の根源は、アールの首長制モデルに倣い、主に穀物からなる「食糧による財政」と希少な奢侈品に限定された「富による財政」の両方に拠っていたらしく、この二面性はウルク期の初期国家にも継承されたとも述べている (McMahon 2020a)。

たしかに、ウルク期の複雑な社会構造がウバイド期に萌芽していたとする見識には頷けるところがある。しかし、真の都市化の先進地域である南メソポタミア、とくにシュメール地方におけるウバイド期からウルク期にかけての推移が不透明なままなので、層位的な発掘の再開により累積しつつある新データとの比較検証が求められる。

指導者の出現そのものについては、先述した前4千年紀初頭 (ウルク前期併行) の墓制の少考において、祭司以外の世俗的な立場の人物が登場した様子のある程度捉えることができた。ただし、この都市化後半の墓制による予察は特定遺跡に限られた事例にもとづいているため、類例の集積による比較検証を要する。

都市の指導者に関しては、墓以外の場所で出土した威信財や円筒印章の図像から有意な情報を得ることができる。ウルク遺跡では、ウルク後期末のリームヘン (Riemchen: 断面が正方形の細長いレンガ) 製建物から銅と銀の合金で鑄造された鍍が出土している (Lenzen 1959)。この特別な鍍は威信財あるいは儀器として奉納され、その所有者は都市の指導者として階層の頂点に立っていたと推定される。

同時に、ウルクで出土している絵文字的な記号の粘土板文書群のなかから、全体量の1割を超える「語彙リスト」(lexical lists) が見つまっている。とくに「職業リスト」(lists of professions) と呼ばれるものが多数

出土し、そこには140あまりの(官)職名が組織的に配列されている。さらに、ウルクでは組織化された労働場面の繰り返し表現された円筒印章も出土している。これらのことより、多くの研究者が指摘してきているように、ウルクの都市誕生段階においてすでに複雑な職位が階層化されていたことはほぼ間違いなさそうである (Englund 1998; Pollock 2001; Nissen 2002; 前川 2007)。

## 2 推定人口と多様性

都市化と都市の議論において、階層性ととも注目されるのが多様性である。都市にはさまざまな出身者が共存し、その多様性を推し量る一つの目安として頻繁に取り上げられてきたのが推定人口(密度)である。メソポタミアにおける都市誕生前後の人口変動の議論は、アダムズのセトルメントパターン研究が中心となり展開した。前3000年頃以降の降水量の減少により、灌漑用水の確保をめぐる競争が激しくなったことが一因となり、ウルク遺跡で前3千年紀初頭の初期王朝時代I期にウルク後期の2倍にまで人口が急増したとされている (Adams 1981: 90-94)。ただし、この人口動態は都市誕生に至った都市化ではなく、都市から都市国家へ推移した様相を描写している。

これまで、メソポタミアの都市にどれだけの人口が居住していたのかは、1ha (10,000m<sup>2</sup>) に約100~200人という前提に立つ推定が主流であったが、解釈にはかなりの幅があり、人口推定そのものに懐疑的な見方もある (McMahon 2020b: 307-308)。前3200年頃の都市ウルクでは、約250ha に約20,000~40,000人が居住していた (1haにつき80人~160人) という推定に対して、1haにつき500人という説もある (Nissen 2002: 7)。上述のローレンスとウィルキンソンは、1ha に約100~150人という前提に立ち、テル・ブラク遺跡におけるLC2期の面積55haには約5,500~8,250人が居住していたとして、その人口を扶養するには半径4.2~5.1kmの可耕地を要すると計算している。彼らによると、この可耕地の範囲は一日に徒歩で行動できる上限になるという (Lawrence & Wilkinson 2015: 340)。先述した通りブラクの居住面積の推定には疑問があるため、手放しでこの数値を受入れることは難しいものの、集落の人口規模と可耕地の範囲を相関させた興味

14 村上達也氏 (メソアメリカ考古学) よりアメリカ国内では首長制モデルは厳しく批判されているというご指摘をいただいた。

深い試算である。

また、前3千年紀の都市国家における都市の人口密度について、H. フランクフォート (Frankfort) が住居址の発掘成果をもとに推定計算している (Frankfort 1950: 103)。彼は初期王朝時代のトゥトゥブ (Tutub; 現代名ハファージェ Khafaje)、アッカド王朝時代のエシュヌナ (Eshnunna; 現代名テル・アスマル Tell Asmar)、古バビロニア時代 (Old Babylonian period) のウルで発掘された住居址の面積を検証した。各遺跡では1acre (約4,000m<sup>2</sup>) に20軒の住居址が確認されたことより、一軒の住居址の平均面積を約200m<sup>2</sup>、一軒に6~10人程度の大人が居住したと仮定して、1acre に120~200人 (1ha に300~500人) の人口密度と推定している。フランクフォートの試算値は現代イスラム都市のアレッポやダマスカスの人口密度 (1ha に約400人) にほぼ等しい (小泉 2016: 195)。

メソポタミアにおける都市国家段階以降の都市には、人口の密集する居住域と、広場や庭園・果樹園などの区域が混在しているため、その人口密度の推定には注意を要する。例えば『旧約聖書』「ヨナ書」には、ニネヴェの都市に「あまたのウシ」がいたと記されている (Jonah 4: 10-11)。ニネヴェ遺跡の発掘調査では城壁の内側に大きな広場が見つかったことから、有事にこうした広場がウシなどの家畜の緊急避難場所として利用されたという意見もある (Frankfort 1950: 103)。都市においてどの空間に照準を合わせるかにより人口密度にばらつきが生じるため、推定計算の根拠を慎重に吟味する必要がある。

一方、都市の人口を墓域から推定する方法もある。メソポタミアの都市では居住者の墓地が城壁外に設けられたとされる。まとまった規模で発掘された例はほとんど知られていないが、都市化段階のいくつかの遺跡では共同墓地が確認されている。とくに神殿の初現など都市化を先導してきた都市的集落のエリドゥ遺跡の事例が注目される。

シュメール地方にあるエリドゥ遺跡の1号丘は、約25haの面積で中心部に居住域が配置され、ウバイド期からウルク期にかけての共同墓地が南西斜面に検出されている。共同墓地から計193基の墓が発掘され、報告者によるともともと1,000基以上の墓があったと推定されている (Safar et al. 1981)。大雑把に墓地造

営時期を500年、1世代25年と仮定すると、1世代で50基の墓が造営されたことになる。エリドゥの墓は、先述したように一对の成人 (おそらく夫婦) の多葬例が目立つことから、基本的に核家族単位の埋葬であったと推定される。つまり、2~3核家族 (成人5~10人程度) による拡大家族で1軒の三列構成プラン住居を構成していたとすると、エリドゥには16.6 (50/3) ~25 (50/2) 軒の住居があり、少なくとも125 (25×5) ~166 (16.6×10) 人の成人がいた都市的集落と推考される。同丘の居住域の全貌は不明であるが、仮に丘全体の10%に相当する2.5haを居住域とすると、1haに50~66人程度の成人がいたと見られる<sup>15</sup>。

ほぼ同時期、北シリア地方にある一般集落のカシュカシヨク遺跡II号丘では南西斜面に約200基の墓が検出された (Koizumi 1991)。墓地造営時期を約500年、1世代25年と仮定すると、1世代で10基の墓がつくられたことになる。カシュカシヨクの墓は単葬が主体であることから、核家族の成人のいずれかが埋葬されたと推定され、エリドゥ同様に2~3核家族 (成人5~10人程度) で拡大家族が構成されていたとすると、1.67 (10/2/3) ~2.5 (10/2/2) 軒に12.5 (2.5×5) ~16.7 (1.67×10) 人の成人が居住していた一般集落と考えられる。同遺跡II号丘の南西側に位置する約5haのIII号丘が居住利用されていたことが分かっており、仮にIII号丘の10%の0.5haを居住域とすると、1haに成人25~33人程度の人口密度が見積もられる。あくまで概算となるが、エリドゥにおける成人の推定人口密度はカシュカシヨクのその2倍となり、やがて都市へと成長する都市的集落と一般集落の違いがすでに都市化段階に現れていた可能性を見出せる。

さらに、メソポタミア周辺における都市の多様性を探る糸口として、本稿で論じてきたよそ者や以降の外部集団の存在が鍵になる。現代の民族例として、トルコ南東部のディヤルバクル郊外では、ムギ類の収穫期になると遊牧民が農村に出稼ぎにやって来て、繁忙期に貴重な労働力を提供してくれている。地元農家によると、出稼ぎにやってきた遊牧民は集落から離れた耕地の中に簡易小屋を建てて仮住まいをしながら、広大な耕地の収穫を手助けしてくれるという。一方、遊牧民にとっては臨時収入を得る魅力的な機会となっている (小泉 2016: 77)。

<sup>15</sup> ただし、この試算では何らかの事情で墓に埋葬されなかった構成員や他集落などへ転出した構成員を含めていないため、これらの人数を勘案すると1haの人口密度は増えると推測される。

このような現代の互恵的な関係は、古代のメソポタミア周辺における都市と多様な外部集団の関係を考える上でのヒントになり得る。かつて比較的安定した暮らしの展開していた都市的集落がよそ者を惹きつけたように、外部集団を誘い寄せる都市は非食糧生産者を含めた大勢の構成員を扶養するだけの余剰食糧を有していた。そこに新たな労働力として、多様な地域から外部集団が加わることで、耕地における農作業の効率化が進み、都市にはますます余剰食糧が蓄えられていったと推定される。

そして、外部集団の役割が都市における階層性を増長することにもつながったようだ。多様な出身の外部集団は農繁期の労働力を提供するだけに留まらず、交易の場面で物資の搬入・搬出にも寄与していたと想像される。その背景には広範な交易ネットワークの展開があり、遠方にいた外部集団が物流の担い手（商人）としてさまざまな物資を都市にもたらすようになったと見られる。外部集団との共存により増えてきた余剰食糧が交換財としても機能して、遠隔地から交易によってもたらされる各種鉱物や貴石などが都市の指導者のもとに集中してより多くの富を形成し、社会的格差をいっそう増長することになったと考えられる。

くわえて、戦争により生じた捕虜の存在も、都市における多様性の一側面を成している。前章で述べたように、ウルク中期後半に銅製の槍先などの本格的な武器が開発されて、緊張の度合いが高まった。まもなくウルク後期になると、ウルク遺跡で出土した円筒印章の印影には後ろ手に縛られた捕虜らしき姿が描かれ、都市誕生段階までには戦争が起きていたと推定されている (Postgate 1992)。都市化後半には、金属や貴石などの輸入資源が篡奪される（未遂も含めた）場面も少なからず生じて戦争前夜の様相となり、都市誕生段階には戦争で負けた側の捕虜が都市支配者主導の生産活動で労働力として動員されたと想像される。

### 3 都市と国家

近年、都市をめぐる研究では、都市の発展と都市なき国家的組織の出現に関する一連の考古資料にもとづき、都市と国家の関係そのものが問われている (Smith 2003: 12; Jennings & Earle 2016: 475)。管見では、都市と国家の関係の議論はチャイルドの都市論をより多角的に深めている印象を受ける。

これまでの都市化と国家形成の議論では、都市を語ることは国家や文明を語ることに等しいと見なされる

傾向があった。本稿で整理したように、メソポタミア周辺における都市化や国家形成は、シュメール地方に現れたウルク文化と近隣地域の在地諸文化との関係で捉えられてきた。こうした地域を単位とした大まかな比較から、より絞り込んだ政体（都市など）同士の比較へ議論が推移している。あわせて、地域間の関係を捉える切り口の一つとして注目されてきた交易などの経済的側面にくわえて、人口移動、対等性と競合、模倣などの多岐にわたる項目に関心が及んでいる。

視点の多様化に関して、実証的なデータ集積、多様な地域・時代、諸方法論・理論について横断的な議論を促進させる知的フォーラムの必要性が説かれ、都市考古学に特化した学術雑誌“*Journal of Urban Archaeology*”が創刊された (Raja & Sindbæk 2020)。誌上では、都市遺跡はセトルメントとして認識されるが、都市性 (urbanism) はそれに留まらず、人々がセトルメント、環境、他の集団とどのように相互作用していたのかを示し、都市の特質はセトルメントだけでなく社会的ネットワークや制度にあると主張されている (Raja & Sindbæk 2020: 10)。都市性の一般法則化を目指した意欲的な学術雑誌としての展開が期待される。

同誌において、都市性を追究する切り口として、規模（人口、面積、密度）、都市機能（外部に影響を及ぼす集住空間内の活動や制度）、都市生活・社会（社会的な複雑性や多様性、トップダウンとボトムアップのプロセス）といった主要次元とともに、都市形態（建築物、形態、レイアウト、プランニング、住居）、都市の意味（宇宙論的・宗教的シンボリズム）、都市の成長（集住空間の規模や経済的生産性の拡大、広範な成長と集約的な成長）といった副次的な次元も提言されている (Smith 2020: 17)。

こうした近年の都市をめぐる研究の潮流には、国家の定義についての曖昧さを回避するために、国家と都市の違いをより多角的に明確化する方向性が見える。メソポタミアの都市と国家の議論では、メソポタミア周辺におけるウルク期以降の体系的な社会変化の解釈が底流となっていることに何ら変りはない。都市国家出現に先行する都市誕生の動因となった「ウルク・ホライズン=ウルク期における物質文化の広がり」(Uruk horizon) には、都市化とともに本格的になった社会の複雑性が投影されている。問題はこの物質文化の動態をどのようにして国家的な様相に紐付けるのかという解釈の仕方にかかっている。

M. フランジパネ (Frangipane) は、南東アナトリアのアルスランテペ遺跡での発掘成果にもとづいて考古学的に国家の定義を試論している (Frangipane 2018)。彼女は、N. ヨフィー (Yoffee) の主張と同様に、一般的に国家がつねにどこでも首長制社会から発展したかどうかは言い切れないとしている (Yoffee 2005: 29-31; Frangipane 2018: 53)。そして、近東における「原初国家」(pristine states) の特徴は、政治的指導者によって支配された他の社会形態と区別され、前4千年紀の国家形成期においていくつかの地域 (広義の大メソポタミア、すなわち南西イランのシアナ平原、南東アナトリアのアルスランテペ周辺、エジプトを含む) においてのみ出現したことが認められるとしている。

彼女によると、原初国家には4つの特徴があり、国家組織が富を産み出し、支配者は官僚的な行政機構に権力を委任し、権力とその行使方法は強固に制度化され、権力が世俗化する傾向にあるという。たしかに、たいてい国家の定義として重視される複雑な社会階層化や都市化の側面は、原初国家の普遍的な要素にはなっていないように見える。しかし、南メソポタミアとハブール川流域では程度の差こそあれ、これらの側面が強力な社会的かつ政治的権力の源泉となり、国家組織をより強固かつ安定的にしたと述べている (Frangipane 2018: 53-54)。フランジパネの試論は、ハブール川流域に立地するテル・ブラクやハモウカル遺跡などを念頭においたものであり、先述の通りその評価については注意を要するものの、考古学的な調査にもとづいたボトムアップ的な目線は傾聴に値する。

今後、都市と国家の関係についての議論を深めるにはどうしたら良いのだろうか。改めてメソポタミアにおける都市と都市国家の関係について整理すると、前3300年頃 (ウルク後期) に都市が誕生し、前3100年頃 (ジェムデット・ナスル期) に都市を核とする政体が固有の領土を保持する都市国家が出現した。ただし、そこには都市国家の影響下に組み込まれて国家に成り切れなかった小都市なども存在している。これらの小都市の自治がどの程度保障されていたのかは不明点が多く、前3千年紀以降の都市国家と都市の関係は、引き続きおもに楔形文字史料 (絵文字的な記号も含む) を用いた研究により解明されていくことになると思われ。

筆者は、前述した都市化の3指標 (都市計画、行政機構、祭祀施設) にもとづく考古資料を楔形文字史料と体系的に組合せることで、メソポタミアの都市国家

像もある程度眺望できると思慮している。とくに、都市国家段階において際立つのは行政機構 (中央集権化) である。先に定義したように、碑文に記されている都市国家の領域を示す境界石、都市国家の中心となる都市を示す都市記号、主神に代わって都市国家を支配する王の住まいである本格的な宮殿に着目している。これらの考古資料とともに、都市誕生後に発明された絵文字的な記号が楔形文字化されていった過程を時系列に比較検証していくことで、メソポタミアの都市国家の輪郭を考古学的に捉えることができると少考している (小泉 2016: 182-186, 188-192)。

また、都市から都市国家への推移において都市計画の側面も注目される。周囲から容易に進入できる平地帯にあるメソポタミアでは、豊富な食、美味しい酒、多様な職の揃った都市に魅せられてさらなる外部集団が集まってくる。ますます流入する外部集団への対策として、都市計画が改良・修正されていったと見られる。多くの人口が集住すれば、都市における生活排水のより効率的な処理が求められ、多様な出身者が集まると、保安対策の面においても神殿や宮殿といった街の中核と居住域との配置がより入念に工夫されたと推測される。

先述したように、都市国家の中心となる都市の在り方の一つとして、前期青銅器時代のメソポタミア周辺に城塞都市が現れた。城塞都市の都市計画は、前4千年紀後半 (ウルク後期) のウルクやハブーバ・カピーラ南に初現した平行四辺形を崩した格好の城壁プランに遡る。ウルク後期に初現した都市計画の系譜は、前3千年紀前半 (初期王朝時代) のアブ・サラビーフやハファージェを経て、前3千年紀後半 (前期青銅器時代後半) のテル・エツ=スウェイハト (Tell es-Sweyhat)、前3千年紀末 (ウル第3王朝時代) のウルなどへ継承された。このように都市国家の出現以降、単なる防御面の拡充に留まらず、ますます集住する外部集団を街の中核から隔離して住ませるゾーニングを本格化した都市計画として城塞都市が具現されたと考えると合点がいく。

あわせて、需要増大により日用品としての土器の大量生産を円滑にするために、都市の工房域の配置も更新されていった可能性が高い。もともと都市化段階において一部の都市的集落では生産域が隔離され、効率的な工芸品生産に向けた大量の原料・燃料の搬入路が確保されたと考えられる (小泉 2000: 27, 2001: 87-90, 2016: 81-83)。都市段階になると火災防止や煙害回避

が意図され、上述したようにハブーバ・カビーラ南では土器工房が街の風下側に配置され、銀の灰吹き工房も隣接していた。そこでは居住者の快適な暮らしを維持するためのゾーニングが実施され、多様な性質の空間を包摂する都市計画が萌芽していた。こうした都市における専門工房の意図的な配置は、国家の管理する分業生産への移行を予感させてくれる。例えば、都市国家段階のアブ・サラビーフでは作業別の各部屋はドア封泥によりアクセスが制限され、土器づくりは分業体制に進展していたと推定されている (Postgate 1990: 103-104; 小泉 2016: 82)。

そして、祭祀施設としての神殿と行政機構の中央集権化を示唆する宮殿との関連は、都市国家の出現以降における政体の在り方を特徴づける議論に少なからず寄与すると見込まれる。メソポタミアの都市は伝統的に主神の祀られる神殿を中心に構成された。すでに都市誕生段階のウルクで認められるように、主神への手厚い儀礼を行った支配者には、都市の支配権が互酬的に授けられたとされる (Steinkeller 2017: 89)。都市国家段階においても、代理人である王が祭祀儀礼を執行し、その見返りとして都市国家の支配権を主神から付与される構図は同様であったと考えられる。新たに登場した宮殿は神殿と併存したが、一般的に主神の祀られる神殿が支配者の居る宮殿よりも相対的に目立っていたと見受けられる。

前3千年紀後半、アッカド王朝時代の領域国家段階になると、神殿と宮殿の関係に変化が生じる。宮殿には限定的に流通した「銀のリング」が保管されるようになり、都市の最終意思決定者が祭司や神官といった聖職者から世俗的な立場の王に変質していた様子が読み取れる (小泉 2016: 186-188, 208-213)。この傾向はアッカド王朝のナラム・シン (Naram-Sin) 王の神格化と符合している (Frayne 1993: E.2.1.4.10)。まもなく、ウル第3王朝時代に度量衡の統一された中央集権国家が現れると、神格化だけでは領域国家全体の秩序の維持が難しくなり、社会正義に関心が向くことになる (Frayne 1997: E.3/2.1.1, E.3/2.1.2; 前田 2003: 95-99; 小泉 2021: 303-304)。拡大する領域を安定的に統治するために王が採用した支配の正当化の仕組みの解明について、もちろんその手掛かりは楔形文字史料の読解に拠るところが大きいですが、円筒印章のモチーフなどの考古資料の考察による裏づけも貢献し続けると予想される。

## VI おわりに

小稿では、チャイルドの都市論に始まった都市化と国家形成をめぐる議論の動向を辿り、メソポタミア周辺における都市化、「よそ者」、都市、都市国家について論じた。まず、都市化について3つの指標 (都市計画、行政機構、祭祀施設) を設定し、これらを満たした都市を都市化の帰結点として定義し、とくに川の流路方向に沿った軸線が都市計画の基礎になっていたことを示した。また、領域を示す境界石、主神を祀る神殿の輪郭をモチーフにした都市記号、王の住まいとなる本格的な宮殿をもってして都市国家の出現として定義した。そして、都市化の3指標にもとづき、よそ者の影響により平等主義的な都市化前半段階から社会的格差や階層化の現れる都市化後半段階へ推移した様相を描写した。さらに、都市化と都市における階層性や多様性について論じ、とくに多様性に関して推定人口 (密度) の検証により、シュメール地方の都市的集落に都市誕生の潜在性を見出すことができた。

同時に、これらの考察を通してさまざまな問題点も見えてきた。遺跡間の階層性に関して、都市と後背地の関係性を検証するために小集落の精緻な調査が求められる。遺跡内の階層性については、都市における住居の規模、墓の立地や副葬品の種類などに関連付けて、職掌や職位の時間的な推移の多角的な議論が望まれる。多様性に関しては、都市化前半の終わり頃に現れたよそ者や都市化後半以降の外部集団が都市誕生に少なからぬ影響を与えたという仮説について、その具体的な発生・進出・共存を考古資料で検証する必要がある。

今後、都市と初期国家 (都市国家) の議論を進展させるには、ますます都市に集住する外部集団との共存を円滑に進めるためのゾーニングの分析が糸口になるであろう。こうしたさまざまな事象をつぶさに捉えるためには、南イラク (シュメール地方) での調査再開によりもたらされる新情報の比較検証が必須となる。結論として国家ありきの議論ではなく、都市化の事象を一つずつ積み上げながら、これらを都市誕生に留まらず、後続する都市国家出現へ実証的につなげていく地道な作業が求められる。あわせて、都市化を伴わない国家の出現についても、考古学的にアプローチする方向性を模索しておく必要がある。

## 参照文献

(日本語文献)

小泉 龍人

- 2000 「古代メソポタミアの土器生産——製作技術と工房立地から見た専門化」『西アジア考古学』1: 11-31。
- 2001 『都市誕生の考古学』同成社。
- 2002a 「ウルク・ワールド・システムとは何か」『西アジア考古学』3: 47-49。
- 2002b 「ウルク・ワールド・システムの彼方」『西アジア考古学』3: 67-73。
- 2010 「都市の起源と西アジア——より快適な暮らしを求めて」『朝倉世界地理講座——大地と人間の物語 第6巻 西アジア』後藤明・木村喜博・安田喜憲(編)、pp. 50-82、朝倉書店。
- 2013 「都市論再考——古代西アジアの都市化議論を検証する」『ラーフィーターン』34: 83-116。
- 2014 「都市とは何か、それはいつ誕生したか」『考古学研究会60周年記念誌 考古学研究60の論点』考古学研究会(編)、pp. 59-60、考古学研究会。
- 2016 『都市の起源——古代の先進地域=西アジアを掘る』講談社。
- 2017 「メソポタミアの都市化と都市」『季刊考古学』141: 46-49。
- 2021 「メソポタミアの都市と王権——「神の街」と支配の正当化」『北陸と世界の考古学——日本考古学協会2021年度金沢大会資料集』日本考古学協会2021年度金沢大会実行委員会(編)、pp. 297-304、日本考古学協会。

西アジア考古学勉強会

- 1994 「G. チャイルドの方法論を探る」『溯航』12: 1-45。

西アジア文明研究センター(編)

- 2016 『シンポジウム予稿集 西アジア文明学の創出 I——今なぜ古代西アジア文明なのか?』西アジア文明研究センター。

藤井 純夫

- 2000 「新石器時代の「町」イェリコの周壁」『考古学雑誌』8(3): 1-36。

藤本 強

- 2007 『都市と都城』同成社。

前川 和也

- 2007 「「(シュメール文字)文明」のなかの「語彙リスト」」『文部科学省科学研究費補助金「特定領域研究」Newsletter』7: 11-20。

前田 徹

- 2003 『メソポタミアの王・神・世界観——シュメール人の王権観』山川出版社。

ロイド、シートン&amp;ミュラー、ハンス・W.

- 1997 『エジプト・メソポタミア建築』堀内清治(訳)、本の友社。

(欧文献)

Adams, Robert McC.

- 1965 *Land Behind Baghdad: A History of Settlement on the Diyala Plains*. Chicago: University of Chicago Press.
- 1981 *Heartland of Cities: Surveys of Ancient Settlement and Land Use on the Central Floodplain of the Euphrates*. Chicago: University of Chicago Press.

Adams, Robert McC. &amp; Hans J. Nissen

- 1972 *The Uruk Countryside: The Natural Setting of Urban Societies*. Chicago: University of Chicago Press.

Akkermans, Peter M.M.G. &amp; Glenn M. Schwartz

- 2003 *The Archaeology of Syria: From Complex Hunter-Gatherers to Early Urban Societies (ca. 16,000-300BC)*. Cambridge: Cambridge University Press.

Algaze, Guillermo

- 2005 [1993] *The Uruk World System: The Dynamics of Expansion of Early Mesopotamian Civilization*. Chicago & London: University of Chicago Press.
- 2008 *Ancient Mesopotamia at the Dawn of Civilization: The Evolution of an Urban Landscape*. Chicago & London: The University of Chicago Press.

Alizadeh, Abbas

- 1994 Social and Economic Complexity and Administrative Technology in a Late Prehistoric Context. In *Archives Before Writing: Proceedings of the International Colloquium, Oriolo Romano, October 23-25, 1991*. Piera Ferioli, Enrica Fiandra, Gian G. Fissore & Marcella Frangipane (eds.), pp. 35-57. Rome: Scriptorium.

Ammerman, Albert J.

- 1985 Plow-Zone Experiments in Calabria, Italy. *Journal of Field Archaeology* 20(1): 33-40.

Ammerman, Albert J., Harold Koster &amp; Elizabeth Pfenning

- 2013 The Longitudinal Study of Land-use at Acconia: Placing the Fieldwork of the Survey Archaeologist in Time. *Journal of Field Archaeology* 38(4): 291-307.

Badler, Virginia R.

- 1996 The Archaeological Evidence for Winemaking, Distribution and Consumption at Proto-Historic Godin Tepe, Iran. In *The Origins and Ancient History of Wine*. Patrick E. McGovern, Stuart J. Fleming & Solomon H. Katz (eds.), pp. 45-56. Philadelphia: The University of Pennsylvania Museum of Archaeology and Anthropology.

Bar-Yosef, Ofer

- 1986 The Walls of Jericho: An Alternative Interpretation. *Current Anthropology* 27(2): 157-162.

Blackman, M. James

- 2000 Chemical Characterization of Local Anatolian and Uruk Style Sealing Clays from Hacinebi. *Paléorient* 25(1): 51-56.

- Boese, Johannes  
1995 *Ausgrabungen in Tell Sheikh Hassan I: Vorläufige Berichte über die Ausgrabungskampagnen 1984–1990 und 1992–1994*. Saarbrücken: Saarbrücker Druckerei und Verlag.
- Boserup, Ester  
1965 *The Conditions of Agricultural Growth: The Economics of Agrarian Change under Population Pressure*. Chicago: Aldine.
- Bova, Samantha, Yair Rosenthal, Zhengyu Liu, Shital P. Godad & Mi Yan  
2021 Seasonal Origin of the Thermal Maxima at the Holocene and the Last Interglacial. *Nature* 589: 548–553.
- Carneiro, Robert L.  
1970 A Theory of the Origin of the State. *Science* 169: 733–738.
- Childe, V. Gordon  
1950 The Urban Revolution. *The Town Planning Review* 21(1): 3–17.
- Crawford, Harriet  
1992 An Early Dynastic Trading Network in North Mesopotamia? In *La circulation des biens, des personnes et des idées dans le Proche-Orient ancien, XXXVIIIe R.A.I.*, pp. 77–82. Paris: Editions Recherche sur les Civilisations.
- Curt-Engelhorn-Stiftung et al. (eds.)  
2013 *Uruk: 5000 Jahre Megacity*. Petersberg: Michael Imhof Verlag.
- Earle, Timothy K.  
1991 The Evolution of Chiefdoms. In *Chiefdoms, Power, Economy, and Ideology*. Timothy K. Earle (ed.), pp. 1–15. Cambridge: Cambridge University Press.
- Englund, Robert K.  
1998 Texts from the Late Uruk Period. In *Mesopotamien: Späturuk-Zeit und Frühdynastische Zeit*. Josef Bauer, Robert K. Englund & Manfred Krebernik (eds.), pp. 15–233. Freiburg & Göttingen: Universitätsverlag - Vandenhoeck & Ruprecht.
- Esin, Ufuk  
1994 The Functional Evidence of Seals and Sealings of Degirmentepe. In *Archives Before Writing: Proceedings of the International Colloquium, Oriolo Romano, October 23–25, 1991*. Piera Ferioli, Enrica Fiandra, Gian G. Fissore & Marcella Frangipane (eds.), pp. 59–82. Rome: Scriptorium.
- Flannery, Kent V.  
1972 The Cultural Evolution of Civilizations. *Annual Review of Ecology and Systematics* 3: 399–426.
- Frangipane, Marcella  
2018 Different Trajectories in State Formation in Greater Mesopotamia: A View from Arslantepe (Turkey). *Journal of Archaeological Research* 26: 3–63.
- Frankfort, Henri  
1950 Town Planning in Ancient Mesopotamia. *The Town Planning Review* 21(2): 98–115.
- Frayne, Douglas  
1993 *Sargonic and Gutian Periods (2334–2113 BC)*. *Royal Inscriptions of Mesopotamia, Early Periods, vol. 2*. Toronto, Buffalo & London: University Press of Toronto.  
1997 *Ur III Period (2112–2004 BC)*. *Royal Inscriptions of Mesopotamia, Early Periods, Vol. 3/2*. Toronto, Buffalo & London: University Press of Toronto.  
1998 *Presargonic Period (2700–2350 BC)*. *Royal Inscriptions of Mesopotamia, Early Periods, Vol. 1*. Toronto, Buffalo & London: University Press of Toronto.
- Fukai, Shinji, Kiyoharu Horiuchi & Toshio Matsutani  
1970 *Telul eth-Thalathat: The Excavation of Tell II, The Third Season, Vol. II*. Tokyo: Institute of Oriental Culture, University of Tokyo.
- Gibson, McGuire  
1973 Population Shift and the Rise of Mesopotamian Civilization. In *The Explanation of Culture Change: Models in Prehistory*. Colin Renfrew (ed.), pp. 447–463. London: Duckworth.
- Green, Sally  
1981 *Prehistorian: A Biography of V. Gordon Childe*. Bradford-on-Avon: Moonraker Press.
- Haerincx, Ernie & Bruno Overlaet  
1996 *The Chalcolithic Period: Parchinah and Hakalan. Luristan Excavation Documents Vol. I*. Belgian Archaeological Mission in Iran, The Excavations in Luristan, Pusht-i Kuh (1965–1979). Brussels: Royal Museums of Art and History.
- Hirth, Kenneth G.  
1978 Problems in Data Recovery and Measurement in Settlement Archaeology. *Journal of Field Archaeology* 5(2): 125–131.
- Hole, Frank  
1983 Symbols of Religion and Social Organization at Susa. In *The Hilly Flanks and Beyond: Essays on the Prehistory of Southwestern Asia*. Cuyler Young, Jr., Philip E. L. Smith & Peder Mortensen (eds.), pp. 315–333. Chicago: Oriental Institute of University of Chicago.
- Jasim, Sabah A.  
1985 *The Ubaid Period in Iraq: Recent Excavations in the Hamrin Region*. *BAR International Series* 267. Oxford: BAR.
- Jennings, Justin & Timothy Earle  
2016 Urbanization, State Formation, and Cooperation. *Current Anthropology* 57(4): 474–493.

- Koizumi, Tatsundo  
1991 Constructions of Layer 2. In *Tell Kashkashok: the Excavations at Tell No. II*. Toshio Matsutani (ed.), pp. 59–65. Tokyo: Institute of Oriental Culture, University of Tokyo.
- Koizumi, Tatsundo & Hiroshi Sudo  
2001 The Stratigraphy and Architectures of Sector B of Tell Kosak Shamali. In *Tell Kosak Shamali, Vol. I*. Yoshihiro Nishiaki & Toshio Matsutani (eds.), pp. 115–152. Tokyo: The University Museum, The University of Tokyo.
- Langdon, Stephen  
1923 *The Weld-Blundell Collection, vol. II. Historical Inscriptions, Containing Principally the Chronological Prism, W-B. 444*. Oxford: Oxford University Press.
- Lawrence Dan, Graham Philip, Hannah Hunt, Lisa Snape-Kennedy & Tony J. Wilkinson  
2016 Long Term Population, City Size and Climate Trends in the Fertile Crescent: A First Approximation. *PLoS ONE* 11(3): e0152563.
- Lawrence Dan & Tony J. Wilkinson  
2015 Hubs and Upstarts: Trajectories of Urbanism in the Northern Fertile Crescent. *Antiquity* 89: 328–344.
- Lenzen, Heinrich J.  
1959 *XV. Vorläufiger Bericht über die von dem Deutschen Archäologischen Institut und der Deutschen Orient-Gesellschaft aus Mitten der Deutschen Forschungsgemeinschaft unternommenen Ausgrabungen in Uruk-Warka*. Berlin: Gebr. Mann Verlag.
- Matsumoto, Ken & Shoichi Yokoyama  
1995 The Report of the Excavations at Tell Songor B. *Al-Rafidan* 16: 1–273.
- Matthews, Roger J.  
1993 *Cities, Seals and Writing: Archaic Seal Impressions from Jemdet Nasr and Ur*. Berlin: Gebr. Mann Verlag.
- McMahon, Augusta  
2020a From Sedentism to States, 10000–3000 BCE. In *A Companion to the Ancient Near East, 2nd edition*. Daniel C. Snell (ed.), pp. 27–43. Hoboken, NJ: John Wiley & Sons.  
2020b Early Urbanism in Northern Mesopotamia. *Journal of Archaeological Research* 28: 289–337.
- McNairn, Barbara  
1980 *The Method and Theory of V. Gordon Childe*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Murakami, Tatsuya, Shigeru Kabata, Julieta M. López J. & Paige Phillips  
2018 A Multi-Method Approach to Reconstructing Occupational History and Activity Areas: A Case Study at the Formative Site of Tlalancaleca, Central Mexico. *Journal of Field Archaeology* 43(8): 634–654.
- Nishiaki Yoshihiro & Toshio Matsutani (eds.)  
2001 *Tell Kosak Shamali, Vol. I*. Tokyo: The University Museum, The University of Tokyo.
- Nissen, Hans J.  
1993 The Context of the Emergence of Writing in Mesopotamia and Iran. In *Early Mesopotamia and Iran: Contact and Conflict 3500–1600BC*. John Curtis (ed.), pp. 54–71. London: British Museum Press.  
2002 Uruk: Key Site of the Period and Key Site of the Problem. In *Artefacts of Complexity: Tracking the Uruk in the Near East*. J. Nicholas Postgate (ed.), pp. 1–16. London: British School of Archaeology in Iraq.
- Oates, Joan  
1993 Trade and Power in the Fifth and Fourth Millennia BC: New Evidence from Northern Mesopotamia. *World Archaeology* 24(3): 403–422.
- Oates, Joan & David Oates  
1997 An Open Gate: Cities of the Fourth Millennium BC (Tell Brak 1997). *Cambridge Archaeological Journal* 7(2): 287–307.
- Oppenheim, A. Leo  
1964 *Ancient Mesopotamia: Portrait of a Dead Civilization*. Chicago & London: The University of Chicago Press.
- Özbal, Hadi, Annemie M. Adriaens & Bryan Earl  
2000 Hacinebi Metal Production and Exchange. *Paléorient* 25(1): 57–65.
- Palmieri, Alba  
1981 Excavations at Arslantepe (Malatya). *Anatolian Studies* 31: 101–119.
- Pearce Julie  
2000 The Late Chalcolithic Sequence at Hacinebi Tepe, Turkey. In *Chronologies des pays du Caucase et de l'Euphrate aux IVe-IIIe millénaires. Actes du Colloque d'Istanbul, 16–19 décembre 1998*. Catherine Marro & Harald Hauptmann (eds.), pp. 115–143. Istanbul: Institut Français d'Études Anatoliennes-Georges Dumézil.
- Pittman, Holly  
2000 Administrative Evidence from Hacinebi Tepe: An Essay on the Local and the Colonial. *Paléorient* 25(1): 43–50.
- Pollock, Susan  
1992 Bureaucrats and Managers, Peasants and Pastoralists, Imperialists and Traders: Research on the Uruk and Jemdet Nasr Periods in Mesopotamia. *Journal of World Prehistory* 6(3): 297–336.  
2001 The Uruk Period in Southern Mesopotamia. In *Uruk Mesopotamia & Its Neighbors: Cross-Cultural Interactions in the Era of State Formation*. Mitchell S. Rothman (ed.), pp. 181–231. Santa Fe, New Mexico: School of American Research Press; Oxford: James Currey Ltd.

- Postgate, J. Nicholas  
1990 Excavations at Abu Salabikh, 1988–89. *Iraq* 52: 95–106.  
1992 *Early Mesopotamia: Society and Economy at the Dawn of History*. London & New York: Routledge.
- Raja, Rubina & Søren M. Sindbæk  
2020 Urban Archaeology: A New Agenda - Editorial. *Journal of Urban Archaeology* 1: 9–13.
- Renfrew, Colin  
1969 Trade and Culture Process in European Prehistory. *Current Anthropology* 10(2, 3): 151–169.  
1986 Introduction: Peer Polity Interaction and Socio-political Change. In *Peer Polity Interaction and Socio-political Change*. Colin Renfrew & John F. Cherry (eds.), pp. 1–18. Cambridge: Cambridge University Press
- Roper, Donna C.  
1976 Lateral Displacement of Artifacts Due to Plowing. *American Antiquity* 41(3): 372–375.
- Rothman, Mitchell S.  
1994 Seal and Sealing Findspot, Design, Audience, and Function: Monitoring Changes in Administrative Oversight during the Fourth Millennium B.C. In *Archives Before Writing: Proceedings of the International Colloquium, Oriolo Romano, October 23–25, 1991*. Piera Ferioli, Enrica Fiandra, Gian G. Fissore & Marcella Frangipane (eds.), pp. 97–124. Rome: Scriptorium.  
2002 *Tepe Gawra: The Evolution of a Small Prehistoric Center in Northern Iraq*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Rothman, Mitchell S. (ed.)  
2001 *Uruk Mesopotamia & Its Neighbors: Cross-Cultural Interactions in the Era of State Formation*. Santa Fe, New Mexico: School of American Research Press; Oxford: James Currey Ltd.
- Rothman, Mitchell S. & Brian Peasnell  
2000 Societal Evolution of Small, Pre-state Centers and Politics: The Example of Tepe Gawra in Northern Mesopotamia. *Paléorient* 25(1): 101–114.
- Safar, Fuad, Mohammad A. Mustafa & Seton Lloyd  
1981 *Eridu*. Baghdad: State Organization of Antiquities and Heritage.
- Sallaberger, Walther & Ingo Schrakamp  
2015 Philological Data for a Historical Chronology of Mesopotamia in the 3rd Millennium. In *Associated Regional Chronologies for the Ancient Near East and the Eastern Mediterranean Vol. III: History & philology*. Walther Sllaberger & Ingo Schrakamp (eds.), pp. 1–136. Turnhout: Brepols.
- Service, Elman R.  
1962 *Primitive Social Organization: An Evolutionary Perspective*. New York: Random House.
- Sissakian, Varoujan K.  
2013 Geological Evolution of the Iraqi Mesopotamia Fore-deep, Inner Platform and Near Surroundings of the Arabian Plate. *Journal of Asian Earth Sciences* 72: 152–163.
- Smith, Monica L.  
2003 Introduction: The Social Construction on Ancient Cities. In *The Social Construction of Ancient Cities*. Monica L. Smith (ed.), pp. 1–36. Washington & London: Smithsonian Books.  
2020 Definitions and Comparisons in Urban Archaeology. *Journal of Urban Archaeology* 1: 15–30.
- Stein, Gill J.  
1999 *Rethinking World-Systems: Diasporas, Colonies, and Interaction in Uruk Mesopotamia*. Tucson: The University of Arizona Press.  
2000 Material Culture and Social Identity: The Evidence for a 4th Millennium BC Mesopotamian Uruk Colony at Hacinebi, Turkey. *Paléorient* 25(1): 11–22.
- Steinkeller, Piotr  
1992 Mesopotamia in the Third Millennium B.C. In *The Anchor Bible Dictionary Vol. 4*. David N. Freedman (ed.), pp. 724–32. New York: Doubleday.  
2017 *History, Texts and Art in Early Babylonia*. Boston & Berlin: De Gruyter.
- Strommenger, Eva  
1980 *Habuba Kabira: eine Stadt vor 5000 Jahren*. Mainz am Rhein: Philipp von Zabern.
- Thompson, R. Campbell & Max E. L. Mallowan  
1933 The British Museum Excavations at Nineveh, 1931–3. *Annals of Archaeology and Anthropology* 20: 71–186.
- Tobler, Arthur J.  
1950 *Excavations at Tepe Gawra, Vol. 2: Levels IX–XX*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Trigger, Bruce G.  
1980 *Gordon Childe: Revolutions in Archaeology*. New York: Columbia University Press.
- Tringham, Ruth  
1983 V. Gordon Childe 25 Years After: His Relevance for the Archaeology of the Eighties. *Journal of Field Archaeology* 10: 85–100.
- Ur, Jason A.  
2010 Cycles of Civilization in Northern Mesopotamia, 4400–2000 BC. *Journal of Archaeological Reviews* 18: 387–431.  
2014 Urban form at Tell Brak across Three Millennia. In *Preludes to Urbanism: Studies in the Late Chalcolithic of Mesopotamia in Honour of Joan Oates*. Augusta McMahon & Harriet Crawford (eds.), pp. 49–62. Cambridge: McDonald Institute for Archaeological Re-

- search.
- Ur, Jason A., Philip Karsgaard & Joan Oates  
 2007 Early Urban Development in the Ancient Near East. *Science* 317: 1188.
- UVB XXI
- 1965 *Vorläufiger Bericht über die von dem Deutschen Archäologischen Institut und der Deutschen Orient-Gesellschaft aus Mitteln der Deutschen Forschungsgemeinschaft unternommenen Ausgrabungen in Uruk-Warka*. Berlin: Gebr. Mann Verlag.
- Woolley, S. Leonard  
 1955 *Ur Excavations, Vol. IV: The Early Periods*. Philadelphia: Museum of University of Pennsylvania; London: British Museum.
- Woolley, S. Leonard & Max E. L. Mallowan  
 1976 *Ur Excavations Vol. VII: The Old Babylonian Period*. London: British Museum.
- Wright, Henry T. & Gregory A. Johnson  
 1975 Population, Exchange, and Early State Formation in Southwestern Iran. *American Anthropologist* 77(2): 267–289.
- Wright, Henry T. & Susan Pollock  
 1987 Regional Socio-Economic Organization in Southern Mesopotamia: The Middle and Later Fifth Millennium. In *Préhistoire de la Mésopotamie: La Mésopotamie préhistorique et l'exploration récente du Djebel Hamrin: Paris, 17–19 décembre 1984*. Jean-Louis Hout (ed.), pp. 317–329. Paris: CNRS.
- Yoffee, Norman  
 2005 *Myths of the Archaic State: Evolution of the Earliest Cities, States, and Civilizations*. Cambridge: Cambridge University Press.

---

# Cities and States in Mesopotamia:

## The Influence of “Strangers” on the Urbanization, and the Appearance of City-States

Tatsundo KOIZUMI\*

The archaeological discussions of cities had been emerged since Gordon Childe’s “Urban Revolution” in 1950, and thereafter urbanizations and state-formations began to be debated through several decades. Here this paper firstly traces the general trend of those discussions after that of Childe.

The paper, then, explains the natural features of Mesopotamia, and defines “strangers” coexisted in city-like settlements of the region. As the threshold of this study the author takes a working hypothesis that such strangers might have played a major role in an onward movement of the urbanization, and provisionally supposes three indexes—city-planning, administrative structure, and ritual facilities—for identifying the urbanization process in an archaeological viewpoint. Thorough the three indexes, the paper describes the process which an egalitarian society of the Ubaid period would have changed to that of the Uruk period characterized by social inequality and stratification under the influence of the strangers; the urbanization is discussed in terms of building comfortable city, increasing interregional tensions and trades, and progressing political domination.

And the author defines the birth of cities ca. 3300 BC as a goal of the urbanization satisfied those three indexes, and particularly assumes that the main axis of city in Mesopotamia might have been fixed by a certain direction parallel to the river flowing around there. After the dawn of the first city in the Sumer region, i.e. Southern Mesopotamia, city-states appeared there around 3100 BC, although both of them have tended to be ambiguously debated. The author, therefore, defines the appearance of city-states as manifestation of more centralized administration in archaeological assemblages than before: boundary stones indicating the territories of city-states, city seal impressions composed of the outline of temples enshrining the city gods, and full-fledged palaces for the kings.

In addition, the author discusses urbanization and cities in Mesopotamia from viewpoints of hierarchy and diversity. The results of the discussion show problems concerning the hierarchy of inter-settlements and intra-settlements to be solved, and the potentiality of city-emergence among city-like settlements of the Sumer region in terms of estimated population and the density. Furthermore, based on recent trends in discussions of cities and states, the author proposes the outlook for archaeological contributions on unravelling Mesopotamian city-states by comparing and verifying administrative structure like city sign impressions, and city-planning such as the expansion of zoning for strangers and the division of labour of pottery production.

### Keywords

Mesopotamia, Ubaid and Uruk Periods, urbanization, cities, city-states

---

\* Japanese-Iraqi Institute for Archaeological Education of Mesopotamia